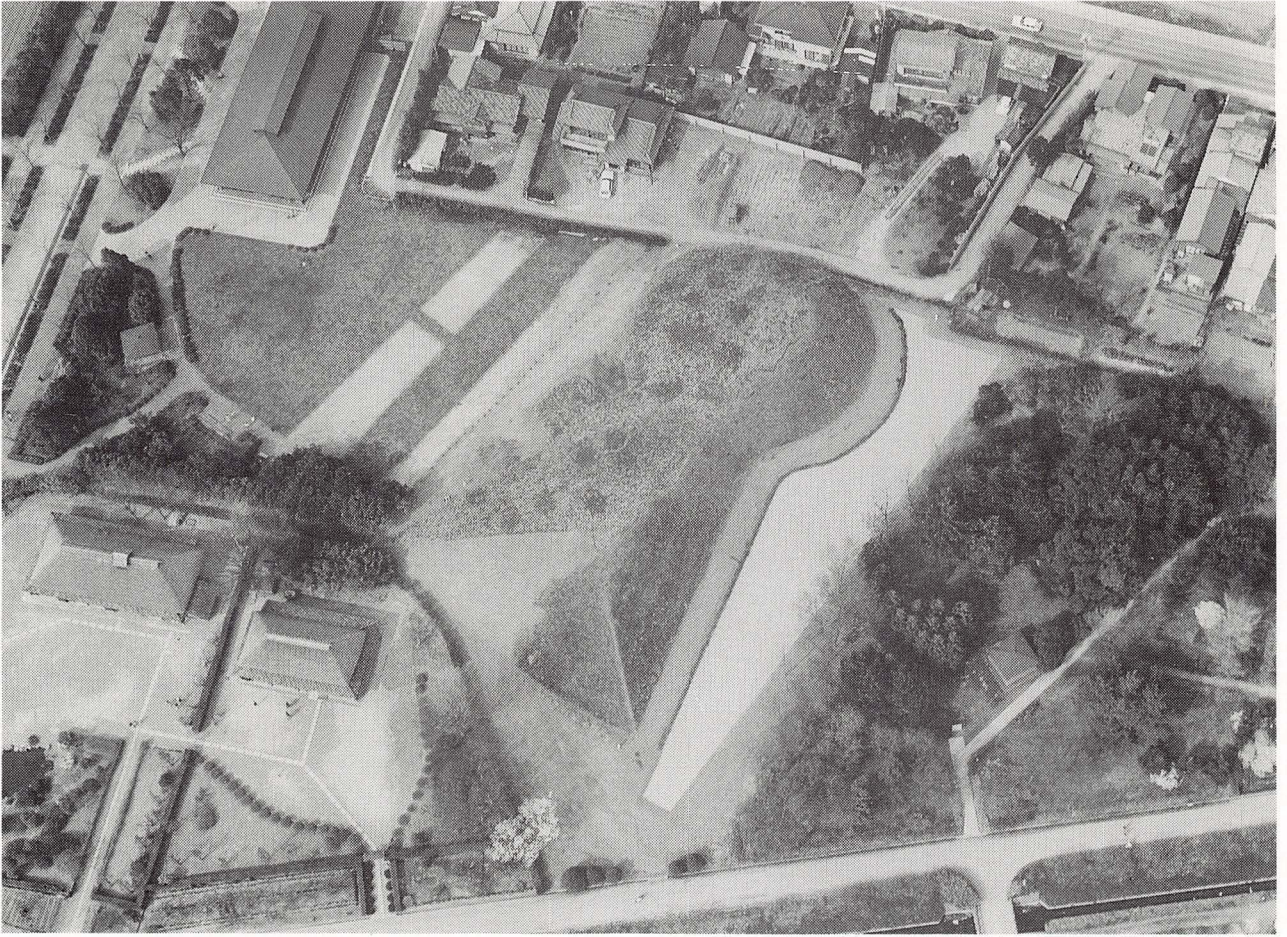


埼玉古墳群発掘調査報告書 第八集

二子山古墳
瓦塚古墳

埼玉県教育委員会



1 瓦塚古墳空中写真（平成元年3月撮影）



2 平成2年度瓦塚古墳A区出土の形象埴輪群

序

昭和十三年に国の史跡として文化財指定を受けた埼玉古墳群は、大型古墳が集中している古墳群ということに常に関心を集めてまいりました。とくに昭和五十三年に稲荷山古墳出土の鉄剣から百十五文字の金錯銘が発見されるに及んで、国内ばかりでなく世界各地からの視察者が絶えない状況にあります。

その間、埼玉県住宅都市部との協力体制で「さきたま風土記の丘」の整備も進み、桜、さつき、つつじ、菖蒲と季節の花に囲まれて家族連れなどの憩いの場ともなっています。

風土記の丘の整備に当たっては、古墳の実態を把握するための発掘調査を行い、その結果に基づいて整備も進めておりますが、平成二年度には二子山古墳の前方部の発掘調査を県単独事業として行い、また、国庫補助事業「埼玉古墳群保存修理事業」の一環として、昭和六十三年から四ヶ年計画で実施してきた瓦塚古墳の発掘調査、及び整備がこのたび終了いたしました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめ「埼玉古墳群発掘調査報告書 第八集」として刊行するものです。

二子山古墳は、全長百三十五メートルの埼玉県下最大の古墳で、発掘調査の結果、外堀や中堤の立ち上りの位置を確認することができました。平成三年度には、外堀や中堤の修復工事が実施されましたが、外堀部分には県住宅都市部によって菖蒲が植えられて県民の方々の目を楽しませることができるようになっております。

瓦塚古墳は、墳丘を修復のうえ形状が分かりやすいように芝張りとし、二重堀は保護も考慮して小石を入れて整備しました。中堤に渡る土橋も復原し、埼玉古墳群の中ではもっとも築造時に近い景観を再現することができました。発掘調査では、踊る埴輪や馬、犬などの埴輪列が出土し、古墳時代の埋葬儀礼を知るのに貴重なデータを得ることができました。

本書が多くの県民や学校・関係機関の方々に広く活用していただければ幸いです。

おわりに、発掘調査から本書の刊行にいたるまで御指導・御協力をいただきました関係者各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成四年三月

埼玉県教育委員会教育長

竹内克好

目次

序	
例言	
調査の組織	
I 調査の経過	1
一 調査に至る経過	1
二 調査の経過	2
(一) 二子山古墳	2
(二) 瓦塚古墳	3
II 埼玉古墳群の立地と環境	8
III 二子山古墳の調査	10
一 遺構	10
二 遺物	22
遺物の観察表	30
三 小結	37
二子山古墳の円筒埴輪について	37
二子山古墳の円筒埴輪について	37
IV 瓦塚古墳の調査	38
一 遺構	38
二 遺物	59
遺物の観察表	86
三 小結	94
瓦塚古墳の埴輪について	94
V 結語	97

挿図目次

第1図	埼玉古墳群における二子山古墳と瓦塚古墳の位置……………	9	第22図	……………	2
第2図	二子山古墳各年度毎発掘調査位置……………	11	第23図	瓦塚古墳造出し部平面図……………	47
第3図	二子山古墳調査区平面図……………	12	第24図	前方部円筒埴輪出土状況図……………	48
第4図	二子山古墳A区平面図……………	13	第25図	平成2年度C区須恵器出土状況図……………	48
第5図	二子山古墳B・C区平面図……………	14	第26図	平成2年度A区形象埴輪出土状況図……………	49
第6図	二子山古墳A区遺物出土状況図……………	15	第27図	平成元年度造出し部埴輪出土状況図……………	50
第7図	二子山古墳B区外堀遺物出土状況図……………	16	第28図	瓦塚古墳土器出土状況図……………	51
第8図	二子山古墳A区第1トレンチ土層断面図……………	17	第29図	瓦塚古墳土層断面図1……………	52
第9図	二子山古墳A区第2～4トレンチ土層断面図……………	18	第30図	……………	53
第10図	二子山古墳B区東壁土層断面図……………	19	第31図	……………	54
第11図	二子山古墳B区西壁・第2トレンチ土層断面図……………	20	第32図	……………	55
第12図	二子山古墳B区aｿeグリッド、土壌、溝、土層断面図……………	21	第33図	……………	56
第13図	二子山古墳出土遺物1……………	24	第34図	……………	57
第14図	……………	25	第35図	……………	58
第15図	……………	26	第36図	……………	59
第16図	……………	27	第37図	瓦塚古墳出土遺物1……………	67
第17図	……………	28	第38図	……………	68
第18図	……………	29	第39図	……………	69
第19図	瓦塚古墳各年度毎発掘調査位置……………	43	第40図	……………	70
第20図	瓦塚古墳の周堀と墳丘の検出状況……………	44	第41図	……………	71
第21図	瓦塚古墳調査区平面図1……………	45	第42図	……………	72
			第43図	……………	73
			第44図	……………	74

第45図	“	9
第46図	“	10
第47図	“	11
第48図	“	12
第49図	“	13
第50図	“	14
第51図	“	15
第52図	“	16
第53図	“	17
第54図	“	18
第55図	“	19
第56図	菖蒲町東浦古墳出土馬形埴輪(馬鐸)	95
第57図	二子山古墳の保存修理	98

図 版 目 次

図版一	二子山古墳A区全景(西から) / 同上(墳丘上から)
図版二	二子山古墳A区全景(南から) / A区1T遺物出土状況
図版三	二子山古墳B区内堀(南から) / 同上(東から)
図版四	二子山古墳B区全景(墳丘上から) / C区全景(西から)
図版五	二子山古墳表探須恵器 / 表探円筒埴輪
図版六	瓦塚古墳昭和63年度2T円筒埴輪列検出状況 / 同上(拡大)
図版七	瓦塚古墳昭和63年度1T完掘状況 / 前方部南調査区完掘状況
図版八	瓦塚古墳昭和63年度後円部東調査区完掘状況(南から) / 前方

図版九	部東調査区完掘状況(北から) 瓦塚古墳平成元年度くびれ部及び造出し全景(西から) / 造出し完掘状況(西から)
図版一〇	瓦塚古墳平成元年度くびれ部及び造出し全景(北から) / B区造出し付近内堀の遺物出土状況
図版一一	瓦塚古墳平成元年度1T墳丘部の遺物出土状況 / 1T円筒埴輪出土状況
図版一二	瓦塚古墳平成元年度D区前方部隅角部 / 4T内堀の遺物出土状況
図版一三	瓦塚古墳墳丘東側調査区全景 / 墳丘東側の中堤検出ライン
図版一四	瓦塚古墳平成2年度A区完掘状況 / A区埴輪出土状況
図版一五	瓦塚古墳平成2年度B区完掘状況 / C区全景
図版一六	瓦塚古墳平成2年度1T完掘状況(中堤と外堀の境界ライン) / 2T完掘状況(外堀と外堤の境界ライン)
図版一七	瓦塚古墳平成2年度3T完掘状況(外堀) / 5T完掘状況(外堀)
図版一八	瓦塚古墳平成3年度A区全景(南から) / 1T遺物出土状況(北から)
図版一九	瓦塚古墳平成3年度2T遺物出土状況 / 3T完掘状況
図版二〇	瓦塚古墳出土遺物
図版二一	“
図版二二	“
図版二三	“
図版二四	“

例 言

一 本書は、埼玉県行田市埼玉五一五八ほかに所在する埼玉古墳群二子山古墳、及び行田市埼玉五二四七ノ一ほかに所在する瓦塚古墳の発掘調査報告書である。

二 二子山古墳の調査は、中堤の整備に先立って、埼玉県教育委員会が主体となり、埼玉県立さきたま資料館が実施した。

三 瓦塚古墳の調査は、文化庁の国庫補助を受けて、埼玉県教育委員会が主体となり、埼玉県立さきたま資料館が実施した。

四 各調査の実施期間、担当者は、次のとおりである。

○二子山古墳 平成三年一月二日～三月二十九日 担当者 中島利治・

谷井彪・大和修・若松良一

○瓦塚古墳 昭和六三年七月二五日～一〇月一九日 担当者 中島利治

・谷井彪・駒宮史朗・若松良一・田中正夫

平成元年七月二五日～一〇月一日 中島利治・谷井彪・駒宮史朗・

若松良一

平成二年七月二三日～一〇月一九日 中島利治・谷井彪・大和修・若

松良一

平成三年八月六日～平成四年二月一日 大和修・若松良一

五 瓦塚古墳の発掘調査については、瓦塚古墳保存整備協議会（平成元年度より史跡埼玉古墳群保存整備協議会）の指導を受けた。

六 各事業の組織は、別表に掲げるとおりである。

七 出土品の整理及び本書の作成は、平成三年度に、埼玉県立さきたま資料館が行って、主に若松良一が当たり、大友務の指導のもとに大和修・中山浩彦・日高慎の協力を得た。

八 本書の執筆は各文末に記したとおりであるが、全体については若松良一が除筆を行い、大村進が監修した。

九 写真撮影は、遺構は各調査担当者が、遺物については、大和修・若松良一が行った。

一〇 二子山古墳の中堤は、調査結果をもとに、埼玉県教育委員会によって復原整備され、埼玉県住宅都市部北部公園建設事務所によって植栽が施された。

一一 発掘調査から整理報告に至るまで左記の方々及び各機関から御指導、御協力を賜った。

赤塚 次郎 飯塚 武 五十嵐紀志子 一瀬 和夫

泉 武 岡崎 久子 川西 宏幸 車崎 正彦

小林 義孝 齊藤 国夫 澤田 秀実 杉山 晋作

高橋 和 滝沢 誠 辰己 和弘 塚田 良道

中島 洋一 土生田純之 三ツ木貞夫 森 浩一

山崎 武 渡辺 豊子

文化庁 埼玉県住宅都市部北部公園建設事務所

行田市教育委員会 菖蒲町教育委員会

発掘参加者 鈴木直 (法政大学大学院生)

日野成央 (法政大学学生)

渡部健吾

中村兼一

森脇淳

桜井元子

瓦塚古墳の調査(平成三年度)及び整理報告(平成三年度、各古墳とも)

主体者 埼玉県教育委員会

教育 長 竹内克好

指導部長 久保田 旺

指導部次長 安田 正信

同 荒井 桂

指導部参事 小川 正

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 早川 智明

主幹 兼 吉川 國男

課長補佐 柴崎 光生

同 副参事 小池 信一

民俗文化財・記念物係 柿沼 幹夫

主 査 本間 岳史

民俗文化財・記念物係 大久根 茂

事務局(発掘調査・整理報告) 埼玉県立 さきたま資料館

指導部参事兼館長 大村 進

副館長 佐古 英捷

庶務課長 小林 栄一

庶務係 柿沼 房雄

同 松本 幸子

学芸課長 大友 務

学芸員 大和 修

同 石川 博行

同 若松 良一

同 田中 裕子

嘱託 鈴木 養平

臨時職員 鈴木 須美江

浜中 紀子

大矢 久子

岩崎 富美子

発掘及び整理参加者 中山 浩彦 (国学院大学卒業生)

日高 慎 (筑波大学大学院生)

澤田 卓也 (早稲田大学学生)

桜井元子 (法政大学学生)

荒井吉正 (専修大学学生)

齊藤香織 (大阪大学学生)

発掘参加者 倉田史恵 (明治大学学生)

野口孝宣 (天正大学学生)

地元住民

瓦塚古墳保存整備協議会委員(平成元年度から)

史跡埼玉古墳群保存整備協議会と改称)

柳田敏司 (県民部参与)

大塚初重 (明治大学教授)

亀井正道 (日本大学教授)

岩崎卓也 (筑波大学教授)

田中一郎 (坂戸市史編さん室長)

滝沢進 (北部公園建設事務所長 昭和六三年度~平成元年度)

外園 惘 (北部公園建設事務所長 平成二年度)

桜井 彬 (北部公園建設事務所長 平成三年度以降)

指導者

加藤允彦 (文化庁記念物課文化財調査官)

学芸課長 谷井 彪
学芸員 柳 正博

同 若松 良一
同 田中正 夫

嘱 託 金子 芳一
発掘参加者 太田 博之

中山 浩彦 (国学院大学学
生)

日高 慎 (同志社大学学
生)

古江 直子 (明治大学学生)
関根 栄司 (埼玉大学学生)

瓦塚古墳の調査 (平成元年度)

主体者 埼玉県教育委員会

教育 長 竹内 克好

指導部長 小池 昭彦

指導部次長 富田 信男

同 渡辺 圭一

事務局 (企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 百瀬 陽二

主幹 兼 梶原 嗣雄

課長補佐 横川 好富

同 横川 好富

課長補佐 加藤 敏昭

民俗文化財・
記念物係長 柿沼 幹夫

民俗文化財・
記念物係 岡本 一夫

同 猪山 健

事務局 (発掘調査) 埼玉県立さきたま資料館

館 長 角田 蔵夫

副館長 中島 利治

主 査 駒宮 史朗

庶務課長 渡辺 秀雄

庶務係 柿沼 房雄

同 松本 幸子

同 川崎 栄一

学芸課長 谷井 彪

学芸員 柳 正博

同 石川 博行

同 若松 良一

嘱 託 金子 芳一

発掘参加者 関根 栄司 (埼玉大学学生)

松本 慎一 (国士館大学学
生)

篠原 哲治

地元住民

瓦塚古墳の調査 (平成二年度)

主体者 埼玉県教育委員会

教育 長 竹内 克好

指導部長 久保田 旺

指導部次長 安田 正信

同 荒井 桂

事務局 (企画調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 早川 智明

主幹 兼 横川 好富

課長補佐 小池 信一

副 参 事 加藤 敏昭

課長補佐 柿沼 幹夫

民俗文化財・
記念物係 岡本 一夫

民俗文化財・
記念物係 猪山 健

同 猪山 健

事務局 (発掘調査) 埼玉県立さきたま資料館

館 長 大村 進

副館長 中島 利治

庶務課長 小林 栄一

庶務係 柿沼 房雄

同 松本 幸子

学芸課長 谷井 彪

学芸員 大和 修

同 石川 博行

同 若松 良一

同 田中 裕子

嘱 託 鈴木 養平

調査の組織

二子山古墳の調査(平成二年度)

主体者 埼玉県教育委員会

教育 長 竹内克好
 指導部長 久保田 旺
 指導次長 安田正信

同 荒井 桂

事務局(企画・調整) 埼玉教育局文化財保護課

課 長 早川智明

主幹兼 横川好富

課長補佐 小池信一

副 参事 加藤敏昭

埋蔵文化財 高橋一夫

係 長 水村孝行

文化財係 市川 修

同 浅野春樹

事務局(発掘調査) 埼玉県立さきたま資料館

館 長 大村 進

副 館 長 中島利治

庶務課長 小林栄一

庶務係 柿沼房雄

同 松本幸子

学芸課長 谷井 彪

学芸員 大和 修

同 石川博行

同 若松良一

同 田中裕子

嘱託 鈴木養平

発掘参加者 澤田秀実(法政大学大学院生)

鈴木直(法政大学)

宮内友行(法政大学)

日野成央

内藤 亮

森脇 淳

児玉紹子

葛西いずみ

桜井元子

中島 操(二松学舎大学)

荒井吉正(専修大学学生)

保坂之寿(大妻短大学生)

坂本尚史(帝京大学学生)

向後達也

地元住民

教育 長 荒井修二

指導部長 岩田 敏

指導次長 藤井 均

同 小池昭彦

事務局(企画・調整) 埼玉教育局文化財保護課

課 長 百瀬陽二

課長補佐 古市芳之

同 栃原嗣雄

同 横川好富

庶務係長 保永清光

庶務係 小野正博

民俗文化財 柿沼幹夫

記念物係長 岡本一雄

民俗文化財 記念物係 岡本一雄

同 猪山 健

事務局(発掘調査) 埼玉県立さきたま資料館

館 長 角田蔵夫

副 館 長 中島利治

主 査 駒宮史朗

庶務課長 鈴木二三男

庶務係 松本幸子

同 田中由夫

同 川崎栄一

瓦塚古墳の調査(昭和六三年)

主体者 埼玉県教育委員会

I 調査の経過

一 調査に至る経過

(一) 二子山古墳

埼玉古墳群最大の前方後円墳である二子山古墳の調査と、その成果を基礎とした復原整備事業は、昭和四二年度の「さきたま風土記の丘」建設着手と同時に開始された。その後、昭和四九・五五・五九年度にも調査が実施され、その都度、整備が進められてきた。内堀は復原され、秋冬には渡り鳥が飛来し、夏には水蓮の花が咲き乱れ、広く見学者に親しまれている。また、中堤とその西側に付設された造出しは盛土復原されて、周遊路として活用されている。また、外堀には菖蒲が植栽されており、花時には観賞客でにぎわいを見せる。

ところで、前方部南側の周堀部分には、民有地が残り、平成元年度まで耕作が行われていた。このため、中堤は漸定的に屈曲した形で整備せざるを得ず、内堀も実際より狭く復原されていた。しかし、平成二年度には、公園用地として当該地を県が買収したので懸案の整備の実施が可能となった。このため、県教育委員会は県住宅都市部と協議のうえ、県立さきたま資料館が発掘調査を実施し、その結果を基礎として、北部公園建設事務所が整備を行うこととした。発掘期間は平成三年一月二一日から三月二九日までであった。

埼玉県教育委員会による古墳群調査一覧表

年度	古墳名(調査箇所)	報告書等
42	二子山、鉄砲山、奥の山古墳(周堀トレンチ調査)	「二子山古墳」(県教育委員会 昭和62年3月)
43	稻荷山古墳(主体部)	「埼玉稻荷山古墳」(県教育委員会 昭和55年11月)
48	稻荷山、丸墓山古墳(周堀トレンチ調査)	「丸墓山古墳」(県教育委員会 昭和63年3月)
49	梅塚、天王山等小円墳群及び二子山古墳(中堤造り出し部)	「埼玉1～7号墳」(県教育委員会 昭和63年3月)
54	瓦塚古墳(前方部南側周堀)	「瓦塚古墳」(県教育委員会 昭和61年3月)
〃	鉄砲山古墳(前方部西側周堀)	「鉄砲山古墳」(〃 昭和60年3月)
55	二子山古墳(後円部北方外堀)	「二子山古墳」(〃 昭和62年3月)
56	愛宕山古墳(後円部東側及び前方部南側周堀)	「愛宕山古墳」(〃 昭和60年3月)
57	瓦塚古墳(墳丘西側周堀)	「瓦塚古墳」(〃 昭和61年3月)
58	鉄砲山古墳(後円部東側周堀)	「鉄砲山古墳」(〃 昭和60年3月)
59	將軍山古墳(前方部西方地区)	「將軍山古墳」(〃 昭和63年3月)
〃	二子山古墳(前方部南方外堀)	「二子山古墳」(〃 昭和62年3月)
60	丸墓山古墳(北、南側周堀)	「丸墓山古墳」(〃 昭和63年3月)
61	瓦塚古墳(東側周堀)	「奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳」(〃平成元年3月)
	丸墓山古墳(墳丘南崩壊部分)	「調査研究報告」第2号(さきたま資料館 平成元年3月)
62	中の山古墳(北東周堀部分)	「奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳」(〃平成元年3月)
	丸墓山古墳(墳丘南崩壊部分)	「調査研究報告」第2号(さきたま資料館 平成元年3月)
63	瓦塚古墳(墳丘と周堀部分)	今回報告
3		
2	二子山古墳(前方部周堀部分)	今回報告

瓦塚古墳は現存する墳丘長六四呎の前方後円墳で、埼玉古墳群中では小規模な前方後円墳である。この古墳は墳丘の東側が過去に土取りされ、原形を大きく損っていた。また、土取り箇所は崖面となり、崩落する危険性があつ

(二) 瓦塚古墳

た。このため、埼玉県教育委員会は文化庁と協議のうえ、国庫補助を受けて、墳丘の保存修理事業を行うこととなった。

初年度の昭和六三年には、瓦塚古墳保存整備協議会の指導により、削平された東側墳裾ラインの検出と、保存状態の良い西側墳丘の調査（主に段築の確認）結果にもとづいて、東側墳丘の盛土復原工事が実施された。

平成元年度には、当初の墳丘のみの保存修理事案を見直し、周堀部分を含めた整備を旨とすることとなり、確認調査と保存修理工事を平成三年度まで継続して実施することが決定された。

確認調査は、墳丘の保存状態の良い部分は最小限にとどめ、周堀の形態把握と墳裾ラインの検出に重点をおいた。

平成三年度には、南側の外堀上に建っていた旧山崎家を遺跡地外に移動して、調査を実施した。平成三年度末には、瓦塚古墳の整備が完了する予定である。本報告は保存修理報告書とは別なので、調査によって明らかになった遺構と遺物に限定して報告することにした。

二 調査の経過

(一) 二子山古墳

今回の発掘調査では、調査区に二子山内堀の水が流入するため、期間中、水中ポンプを利用し、内堀の貯水排出を行い、水位を下げることに努めた。

一月二三日～三一日

二子山古墳前方部の西側にA区、南側にB区を設定。バックホウにて表土

を除去。A区は外堀、B区は内堀・中堤・外堀のプラン確認を進める。

二月一日～五日

B区内堀にa・bグリットを設定し、掘り下げる。内堀堀底と考えられるローム層を検出。内堀の中堤際に、明瞭な立ち上がりを確認。多くの円筒埴輪片が中堤の流れ込み付近に集中している。a・bグリットには、後世の二本の杭跡と一条の溝があり、陶磁器類・瓦片出土。

二月四日

船を出して二子山墳丘に渡り、墳裾を廻って遺物の表探を実施する。造り出し部北側より器台の破片、その南側より甕の口縁部及び などの須恵器片を採集。境裾全周にわたり多くの円筒埴輪がみとめられるが、特に造出し部のある西側に集中していた。

二月六日～九日

B区内堀aグリットの遺物ドット図作成。出土状況写真撮影を行う。B区外堀部に第2トレンチを設定、掘り下げる。外堀中堤寄りに円筒埴輪片が比較的多く確認される。第2トレンチ東壁に沿うように、青灰色の粘質土の溝がある。遺物から新しい水田の水路跡か。B区内堀にc・dグリットを設定。

二月一二日～一五日

第2トレンチ内で過年度の深掘に当たる。またトレンチ中央付近の堀底には、長軸一八〇センチ、短軸八〇センチで立ち上がりの急な土拵がある。一号土拵とする。あるいは墓跡とも考えられる。第2トレンチ、遺物ドット図、平面図作成。B区内堀e・fグリットを設定し、掘り下げる。

二月一六日～二二日

B区西壁の土層断面図作成。外堀の中堤際立ち上がり部は確認できず。

B区に新たに、第1トレンチを設定、外堀の中堤立ち上がり検出作業を行う。B区内堀a s eの各土層断面図、遺物ドット図作成。B区全景の写真撮影実施。A区、外堀の中堤寄りに第1トレンチを設定、掘り下げる。外堀側中堤寄りに円筒埴輪片多数出土。A区第2トレンチを設定。

二月二五日～二月二八日

B区第1トレンチの遺物ドット図及び平面図作成。A区第1・2トレンチ外堀立ち上がり部の検出作業を行う。あわせて外堀の外堤立ち上がり付近を検出する目的で第3トレンチを設定。またA区第1、2トレンチの中間、外堀中堤寄りに第4トレンチを設定。外堤、中堤双方の立ち上がり部の保存状態良好。外堀側中堤寄りの第4トレンチの方に円筒埴輪片が多い。A区第1トレンチ中央部で人物埴輪のアゴの破片を一点検出。A区各トレンチの遺物ドット図、平面図作成。写真撮影を終える。

三月四日～八日

A区トレンチ完掘。A区中堤の保存状況を調査。土層断面図作成、写真撮影。B区外堀の東壁土層断面図作成、B区の外堤立ち上がり部推定部とともに写真撮影。

三月八日～一五日

A区全体測量とB区の補足測量を行う。

三月一八日～二九日

遺跡原点杭の座標の確認、補足調査を実施。A区、B区とも遺構を砂で保護した後、埋め戻す。

(二) 瓦塚古墳

昭和六三年度

昭和六三年度は、後円部西側と墳丘と前方部西側墳丘及び前方部東側の周堀部分にトレンチを設定し、さらに後円部東側・前方部東側及び南側に墳裾ラインの検出を目的とした調査区を設定して調査を行った。調査期間は、七月二五日から十月十九日までである。

七月二五日

墳丘にトレンチ（後円部側を第1、前方部側を第2）を設定。

八月一日

トレンチの表土除去作業を開始する。また、調査予定地内の樹木の移植作業を行う。

八月三日

第1トレンチに並行して、第2トレンチにおいても発掘作業を開始。

八月五日

第2トレンチ中段下位において、円筒埴輪底部3個体が並んだ状態で検出される。

八月八日

第2トレンチ遺物集中区の微細図を作成。前方部南調査区の掘り下げを開始する。

八月九日

第2トレンチ円筒埴輪列の出土状況の写真撮影を行う。埴輪列南端にわずか基底部の遺存する4個体目の円筒埴輪を確認。前方部南調査区においては

ベルトコンベアーを使用して表土及び覆土を排土する。表土中からはゴミなどが出土し、部分的にかなり深くまで攪乱を受けている。

八月一五日

第1トレンチ土層断面図を作成。全景写真撮影を行う。第2トレンチ円筒埴輪列底部の出土状況写真を撮影。微細図作成の後、遺物の取り上げを完了。取り上げ後の遺構に砂を入れる。

八月一六日

第2トレンチのその他の遺物の取り上げを行う。雨のため作業中断。

八月一九日

前方部南調査区の遺物分布図を作成し、遺物を取り上げる。

八月二三日

前方部南・東調査区を発掘。

八月二六日

第1・2トレンチの埋め戻し作業を開始。

八月三一日

トレンチの埋め戻しを終了。

九月一六日

前方部東調査区に第3トレンチを設定し、発掘作業を開始。

九月二〇日

前方部東調査区を引続き調査するが、雨のため作業中断。

九月二九日

後円部東調査区の発掘作業を開始。

十月三日

後円部東調査区の測量を開始。

十月一日

前方部東調査区から遺構保護のための砂入れを開始。

十月一三日

前方部東調査区から埋め戻し開始。

十月一九日

埋め戻し作業終了。器材等を撤収し、調査を終了する。

平成元年度

平成元年度は、墳丘西側くびれ部及び前方部南西隅角部に調査区を設定、前方部主軸付近と墳丘東側中堤付近にトレンチを設定し、調査を行った。調査期間は、七月二五日から一〇月一三日までである。

七月二五日

調査区周辺の樹木の切除・移植作業及び垣根の切廻し作業を開始。

七月二七日

発掘区の設定。墳丘くびれ部西側の第1トレンチの掘り下げを開始。円筒埴輪片が大量に出土した。墳丘上段と中段の双方に埴輪列の可能性あり。

七月三一日

七月三一日

第1トレンチ上半部で盛土面まで到達。

八月四日

造出し南側に設定したC区の掘り下げを開始。円筒埴輪片、須恵器片、土師器片が大量に出土した。

八月八日

前方部南西隅角部のD区の掘り下げを開始。内堀の中堤側立ち上がりの検

出を目的として、墳丘東側に第2・第3トレンチを設定。

八月九日

第2・第3トレンチの掘り下げを行い、中堤プランを検出。昭和六一年度調査における第2トレンチを試掘し、中堤プランを検出する。これら三本のトレンチにかかる長大な三桁幅の南北方向のトレンチを設定し、中堤プランの全容を明らかにしようと試みる。

八月一〇日

墳丘東側の中堤プランの確認終了。墳丘西側くびれ部に設定した第1トレンチ、B区、C区を周堀側にそれぞれ拡張。D区はプラン確認を終了し、写真撮影を行った。

八月一日

B区、C区ともに造出し部を露出。後世の溝(SD1)によって造り出し根本部分が切られていることが判明した。SD1からはガラス器等が出土。

八月二日

D区完掘。明瞭な形で前方部南西隅角部を検出した。内堀との比高差は約四〇センチで、遺物量は少なかった。

八月二二日

A区で後円部立ち上がりを検出。遺物は少量出土した。

八月三〇日

墳丘東側中堤プラン確認後、写真撮影。D区の東側に二桁四方のE区を設定、掘り下げを開始する。前方部中軸線上に、一・五桁幅の第4トレンチを設定。

九月六日

第4トレンチの墳丘部の調査。遺物は少量の出土で、円筒埴輪列は周堀内へ流れ込んだもよう。

九月二六日

A区を精査し、完掘。写真撮影を終了。第1・第4トレンチ及びC区の遺物検出作業を行う。

九月二七日

C区・E区を完掘し、写真撮影。第4トレンチの遺物出土状況を写真撮影。

一〇月二日

第4トレンチを精査。内堀底面と思われた部分はロームブロックと黒色土の混合層であるため、更に掘り下げを行う。B・C区間にF区を設定。

一〇月三日

F区掘り下げ開始。須恵器が多く出土。

一〇月六日

C区北端に土壌があり、写真撮影を行う。

一〇月一日

第1トレンチ遺物ドット図作成。遺構実測、遺構完掘写真の撮影を行う。

一〇月二日

遺構実測、遺構完掘写真の撮影を終了。埋め戻しを開始。

一〇月三日

埋め戻し終了。器材等を撤収し、調査を終了する。

平成二年度

平成二年度は前方部西側にA区、山崎家裏手にB区、山崎家東側にC区を設定し未整備の南側内堀・中堤・外堀の調査を行った。一方、墳丘の東側で

は、外堀の形状を把握するために、南北方向の長大な二本のトレンチを設定し、さらに、これに直交する三本のトレンチと六個所のテストピットを加えて調査を実施した。調査期間は七月二三日から一〇月一九日までである。

七月二三日

準備作業。安全柵を設置の後、重機を回送。

七月二四日～二五日

山崎家裏手の竹やぶを伐採後、北側にA区を設定し、重機で表土剥ぎ実施。

A区は攪乱が予想外にひどい。

七月二六日

B区の表土剥ぎ実施。内堀の隅角部が明瞭に検出された。

七月二七日～三一日

C区の表土剥ぎを実施。A区のグリッド杭打ちとB区の人力による掘り下げも開始。C区のプラン確認結果から、中堤は剣菱形に尖る可能性が出てきた。

墳丘東側では、外堀に直交する三本のトレンチによって外堀の方向を確認し、内側の立ち上がりライン検出用の第1トレンチと外側の立ち上がりライン検出用の第2トレンチを設定して重機による表土剥ぎを開始。

八月六日

A～C区と第1・2トレンチのプラン確認写真撮影。全体の1/200 平面

図作成。B区の内堀隅角部からは須恵器大甕片と円筒埴輪片が出土。

八月八日

A区南端に二対幅のトレンチを設定。外堀部分から掘り下げ開始。

八月一〇日

台風上陸、風雨強し。

八月二〇日

A区外堀の中堤寄り部分から、人物埴輪頭部や馬形埴輪の破片などが集中して出土しはじめた。C区では昨年度の第4トレンチ（墳丘主軸線上）の延長部に第5トレンチを設定し、外堀の掘り下げを開始。

八月二九日

A区外堀の北側に拡張区を設定して掘り下げる。振り分け髪の男子頭部が出土。かろうじて攪乱をまぬがれた状態で、胴部片などがみられない。

八月三〇日

A区内堀精査、写真撮影。B区内堀隅角部精査、写真撮影。4T・B区土層断面図作成。

九月三日

A区外堀の中堤寄り拡張して掘り下げ。馬等の形象埴輪出土。C区東壁沿いを第9トレンチとして掘り下げる。その結果、外堀が浅くなっており、掘り残された可能性が出てきた。

九月五日

第10トレンチを掘り下げ後、拡張。須恵器長頸瓶の底部出土。付近より掘立柱の柱穴が三個所みつかる。

九月一三日

墳丘東側の外堀立ち上がり検出のためテストピットを四個所設ける。第3トレンチでは外堀の中堤側立ち上がり部に縄文の住居址らしき遺構がある。

九月一八日～一九日

A区平面図作成。写真撮影。

一〇月九日～一九日

遺構を保護した後、重機による埋め戻しを行う。

平成三年度

平成三年度は、旧山崎家を移動した後、その敷地であった前方部南西側に調査区を設定して調査を行った。調査期間は、八月六日から十一月五日までである。

八月六日

重機を用いて調査区の表土剥ぎを開始する。遠藤家裏手では掘削地に厚く客土が乗っており、外堀の遺存状況は悪い模様。

八月一〇日

表土剥ぎ終了。山崎家跡地内では外堀・中堤・内堀のプランが明瞭に把握された。一方、垣根の外側の外堀部分をB区とし、併せて表土剥ぎを行った。

八月二〇日

台風の影響で激しい雨量となり調査区が完全に水没する。

八月二三日

B区の調査開始。本日、風土記の丘教室の発掘体験実習を開催。

八月二六日

A区の東側に外堀を横断する第2トレンチを設定し、掘り下げ開始。

八月二八日

第2トレンチの精査後、中堤側立ち上がり部の円筒埴輪片の出土状況を撮影。A区西端に第1トレンチを設定して掘り下げ開始。

八月三〇日

遺跡原点から水準点を移動。第2トレンチの土層断面図及び遺物ドット図

を作成。

九月二日

第1トレンチの中堤・外堤の立ち上がり部の検出作業。南側に中近世の溝あり。第2トレンチのものと共通する。第2トレンチの平面図作成。

九月四日

第1トレンチの遺物取り上げ終了後、平面図作成。外堀の外堤寄りに第4トレンチを設定して掘り下げ開始。馬鈴の出土あり。

九月六日

A区全景写真撮影を行う。

九月九日

台風のため現場中止

九月二四日

先日の大雨でA区にたまった水をポンプで排水する。

十一月五日

遠藤家裏の第7トレンチを完掘。外堀の遺物包含層は削平されており、期待していた形象埴輪の出土はなかった。しかし、西端に検出された薬研堀内から馬や器財埴輪片がまとまって出土した。このほかA区の外堀内側に張り出した埴輪だまり(P1)と、外堀外側の円形土壙(P2)を調査。A区遺構図、第7トレンチ平板実測完了。本日をもって瓦塚古墳の調査を終了する。

II 埼玉古墳群の立地と環境

埼玉古墳群は、北に利根川が東流し、荒川が西から南に流れている。行田市の市街地の東南約2・5kmの所にある。行田から羽生、加須市周辺は加須低地と呼ばれ、大宮台地が北へ延びて、鴻巣市周辺までは低地との比高差が明確にあったものが、これより北方では、徐々に低くなり、関東造盆地運動と、利根川、荒川の氾濫による沖積土の堆積作用によって、埋没ローム台地となっている。古墳群周辺の標高は海拔18m程度であり、周囲は水田および宅地となっており、現状では、古墳は周囲より微高地状に高くなった部分にあるが、行田市街地の忍城跡周辺や、小針沼の埋立用に土取りされ、その後、水田として利用されたため、比高差を生じたものも多い。

埼玉古墳群は、北は旧忍川によって区切られているが、その北側にも直径50mの規模を持つ円墳の白山神社古墳と、最近、行田市教育委員会によって、道路改修に伴って、発掘調査が実施された。愛宕山古墳、そしてその北にある神明山古墳も、一連の古墳である。白山神社古墳より北は、谷地形となり、現在工業団地がある。八幡山古墳や地蔵塚古墳等の、若小玉古墳群がのる埋没ローム台地とは、小針沼へ流れ込む長野落しの谷によって、隔てられている。若小玉古墳群の南は、三宝塚周辺を境目として、埋没ローム台地上は遺跡が希薄となる様である。

古墳群の南側は、近年の当館の調査により、二重堀を持つ方墳であった事が明らかになった、戸場口山古墳が南限となっている。

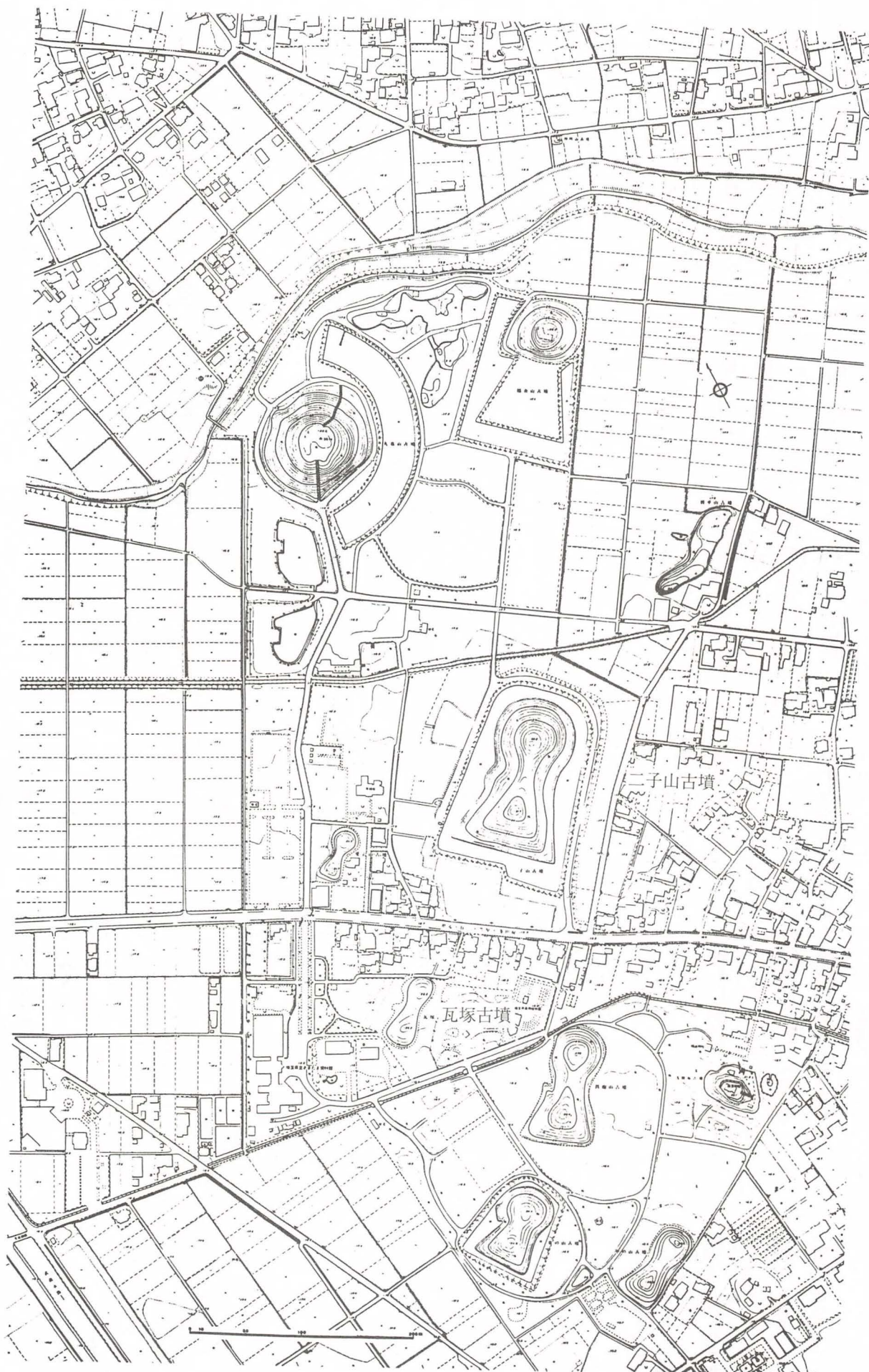
西は、陣場の、かつて人物埴輪頭部を出土した「ボケ塚」を含む、9基の

埼玉古墳群主要古墳一覧

古墳名	主軸長	後円部径	高さ	前方部幅	高さ	方向角 (北-東)
丸蓋山古墳 (円墳)	105.0		18.9			
	(出土遺物) 円筒・盾・人物埴輪片、須恵器甕片 (時期) 6世紀初頭					
福荷山古墳	120.0	62.0	11.7	74.0	10.7 (推定)	39.0°
	(出土遺物・主体部) 金錯銘鉄剣、直刀、鉦、刀子、鐵、掛甲、馬具、鎌、鐵鉋、鉋、鉄斧、鍬子、砥石、勾玉、銀環、鏡、帶金具 (出土遺物周堀等) 円筒・朝顔形埴輪、人物・動物・形象埴輪、土師器須恵器、手捏土製品 (出土遺物伝くべし部出土) 須恵器(蓋坏・高坏・罎)・土師器(甕) (時期) 5世紀末葉					
二子山古墳	135.0	66.5	12.8	93.0	14.7	38.5°
	(出土遺物・内・外堀) 円筒埴輪片、蓋・盾・羽・馬・水鳥・人物埴輪片、土師器甕片、須恵器甕、壺、器台、高林片 (時期) 6世紀前半					
鉄砲山古墳	112.0	56.0	9.0	73.0	9.8	33.5°
	(出土遺物・内・外堀) 円筒埴輪、朝顔形埴輪、土師器杯片、須恵器杯片、須恵器甕片 (時期) 6世紀後葉					
将軍山古墳	101.5	57.0	5.0 (残高)	50.0 (推定)	8.2	65.0°
	(出土遺物・主体部) 銅鏡、須恵器無蓋高杯、鏡、石製盤、鉄斧、環刀、大刀残欠、直刀片、鉄矛、掛甲、衝角付青片、馬具、水晶製三輪玉、金銅製三輪玉、ガラス小玉、蛇行状鉄器、馬青片 (出土遺物・内・外堀) 円筒埴輪、形象埴輪、須恵器甕片 (時期) 6世紀後葉					
中の山古墳	79.0	39.0	4.44	40.0	5.5	56.0°
	(出土遺物・内・外堀) 須恵器埴輪蓋、須恵器朝顔形円筒、円筒埴輪片、須恵器蓋坏片、須恵器高坏片、須恵器甕片 (時期) 6世紀末～7世紀初頭					
瓦塚古墳	67.0	30.7	4.9	41.0	4.7	48.0°
	(出土遺物・内・外堀) 円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵器片、(外堀中堤寄り主体) 冢形埴輪、盾形埴輪、大刀形埴輪、水鳥形埴輪、大形埴輪、人物埴輪、馬形埴輪 (時期) 6世紀中葉					
奥の山古墳	66.5	37.0	6.1	57.5	6.5	50.5°
	(出土遺物・周堀) 円筒埴輪片、朝顔形埴輪片、人物埴輪片、鹿形・馬形埴輪片、大刀形・鞍形埴輪片、冢形埴輪片、須恵器片 (時期) 6世紀中葉のやや早い時期					
愛宕山古墳	53.0	30.0	3.4	41.5	3.3	57.0°
	(出土遺物・内・外堀) 円筒埴輪、朝顔形埴輪片、大刀形・蓋形埴輪片、須恵器甕片、人物埴輪 (時期) 6世紀前半					

小円墳群があったとされる地域が西限と思われる。さきたま資料館の西方約二百m程の、現行田市火葬場周辺に、大人塚うしという前方後円墳があったとされ、試掘調査の折に埴輪が採集されているが、詳細は明らかではない。東は、将軍山の東南の、現在は下埼玉の集落の中にあり、位置が今一つ不明確な山宮山(しゃんぐり山?)と呼ばれていた若干周囲より高い地点があるのが東限であろう。これらの小円墳と9基の大型墳を含め、現在確認できるもので32基、かつてあったと言われるものを含めて、45基によって、埼玉古墳群は構成されている。

(大和 修)



第1図 埼玉古墳群における二子山古墳と瓦塚古墳の位置

昭和59年3月測図

III 一子山古墳の調査

一 遺構

二子山古墳の調査は、昭和四二年、四九年、五五年、五九年と過去四回にわたって実施された。過年度の調査では、二重周堀、中堤造出しの存在を確認するなどの成果があったが、二子山古墳の全体像を把握するまでには至っていない。

平成二年度の調査は、二子山古墳未整備地区を対象とし、前方部前面の内堀の形態、中堤及び外堀の形態を確認することを目的として実施された。

調査区は、二子山墳丘から見て西側をA区、南側をB区とした。A区では表土を約三〇センチ剥いで、中堤及び外堀のプランを確認した後、外堀を横断するトレンチを二本(1T・2T)、外堀中堤側立ち上がり付近(4T)と外堀外堤側立ち上がり付近(3T)にそれぞれ一本のトレンチを設定し調査を行った。B区では、内堀、中堤および外堀のプラン確認後、内堀についてはa～eまでのグリットを組み調査を進めた。また、外堀にはトレンチを二本(1T・2T)設定した。C区は、B区内堀aグリットの東側に拡張区として設定した。

(一) 内堀

内堀中堤側の立ち上がり部分は、全体的に良好な遺存状態であり、a・bグリットといった主軸に近い位置では、特に明瞭な立ち上がり状況を示していた。埴輪などの遺物は立ち上がり付近に集中しており、内堀コーナー寄りのe・dグリットに比べ主軸寄りのa・bグリットでの出土量が多かった。

覆土は、中堤からの崩落土と思われる暗褐色土が、立ち上がり付近に見られ、ロームブロックを多量に含む。部分的に灰色の粘質土が見られたが、全

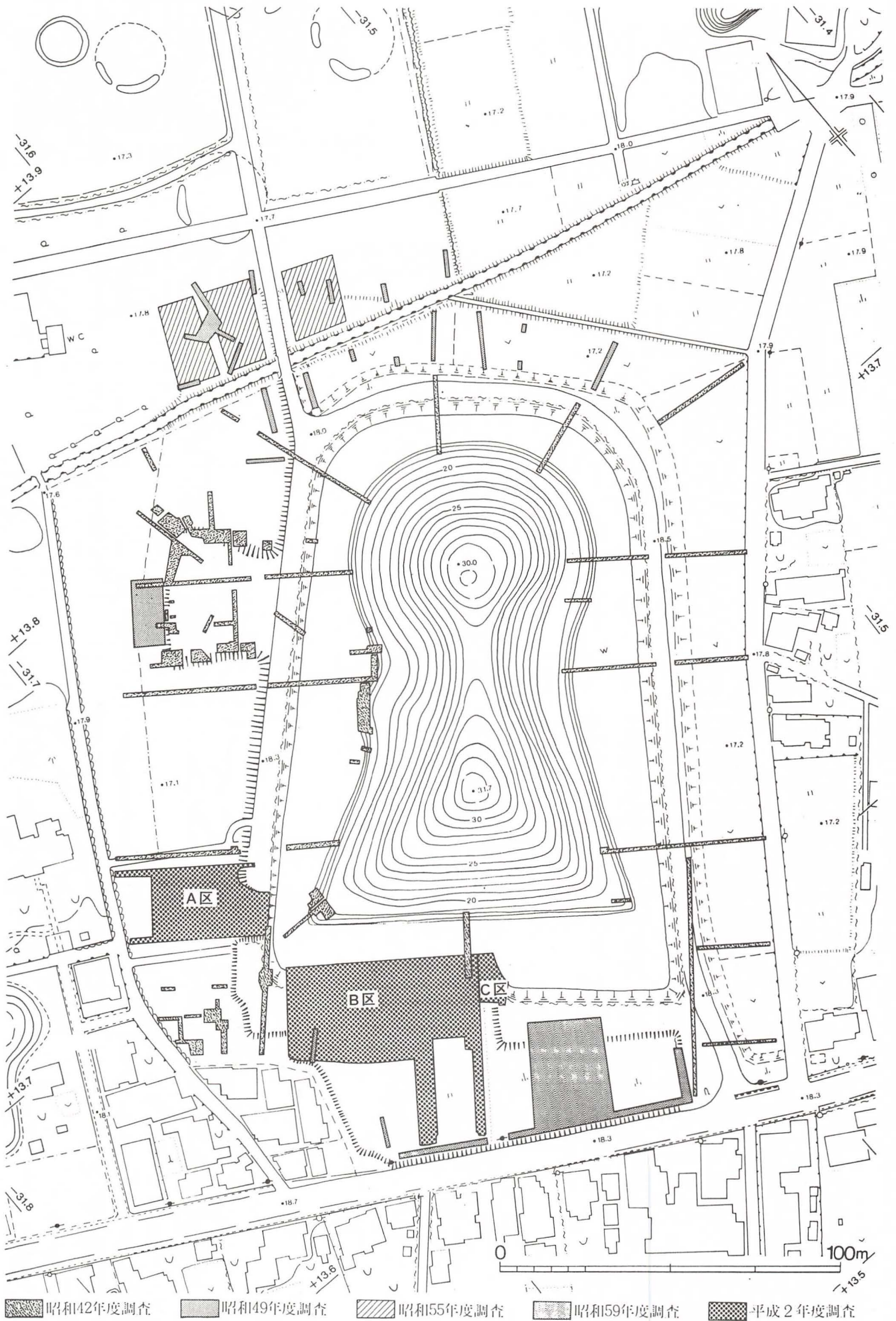
般的には多少のロームブロックを含む暗褐色土が内堀を覆っている。この暗褐色土は、上層でやや明るく、堀底へ近づくにつれ暗みを増す(第10～第12図)。内堀の深さは、確認面の一七センチからの計測で、四〇センチ前後であった。また、前方部前面の内堀中堤側立ち上がりラインは、主軸に対し直交しておらず、内堀コーナーから外側へ向って延びており、主軸とは八三度で交差することが判明した。そのため視覚的には、内堀の中央部が膨らんでいるように見え、コーナー付近と中央部では幅において約九センチの差が認められる。以上のような内堀の検出状況から、二子山古墳の周堀は、稲荷山古墳の周堀のように、長方形を示すものではないことが確実となった。

(二) 中堤

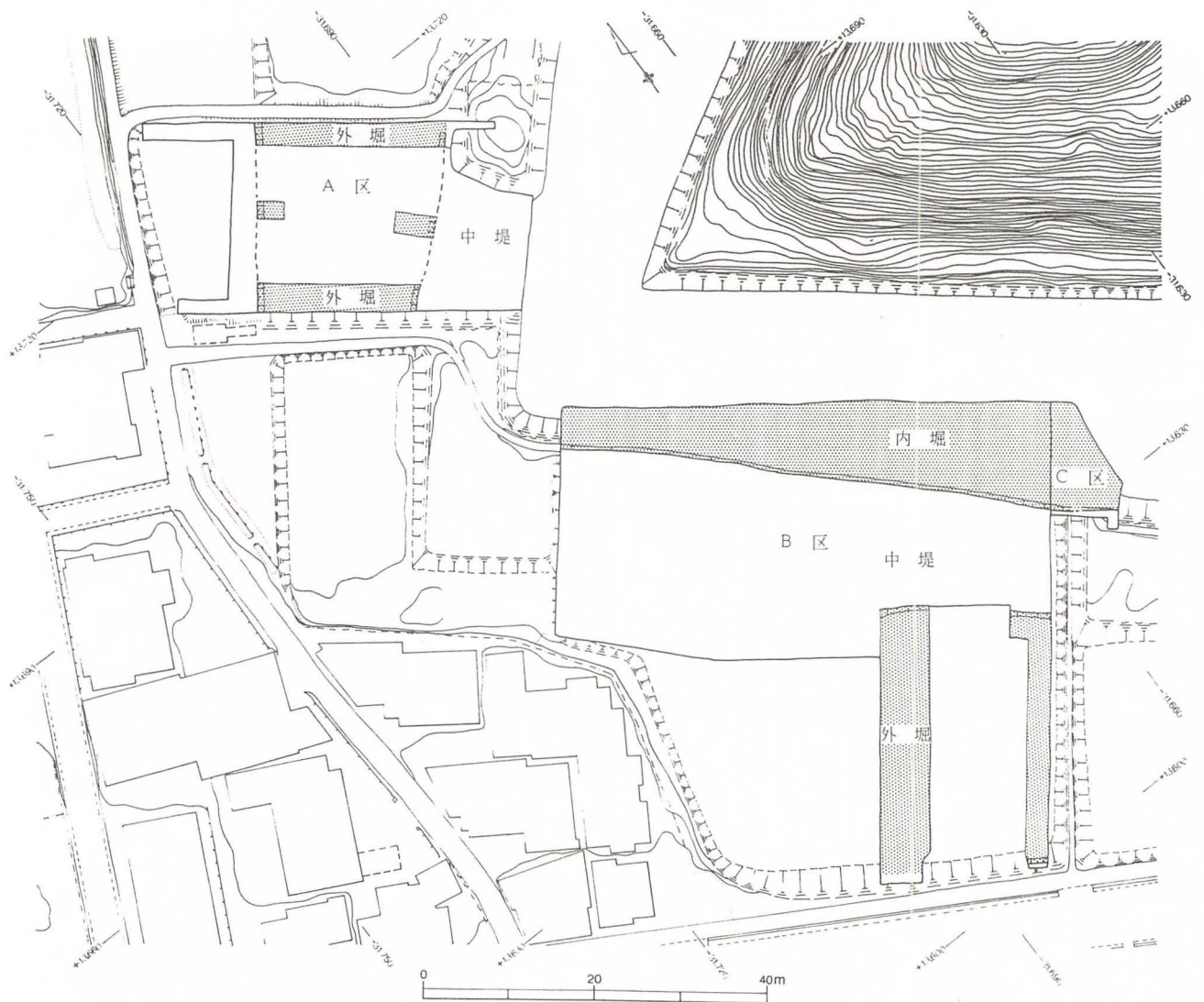
調査区の表土を三〇センチほど剥ぎ取ると、中堤の確認面であるロームが検出され、確認面での平均的な標高は、A区、B区とも一七センチであった。

B区では、水田耕作による攪乱が、相当深くまで及んでいた。そのため、西側調査区では、中堤と外堀との境界がかなり不明瞭となっており、外堀の立ち上がりラインを検出することは不可能であった。主軸に近い東側調査区では、中堤上に溝による攪乱を受けてはいたが、外堀との境界を示す立ち上がりラインは、良好な状態で検出できた。中堤の幅は、計測可能なB区東側で、一二～一三センチの計測値が得られ、過年度の成果(『埼玉古墳群発掘調査報告書第五集』昭和六三年)とほぼ一致する。確認面の上層には、灰褐色粘質土と、さらにその上部に暗褐色土が推積しており、それぞれ天明年間の白色バミスを含んでいる。また、これらの土層は、周堀にも連続している。

二子山墳丘とA区の間には、小山状に盛り上がった箇所が存在し、二子山の中堤が唯一遺存する部分であると考えられている。今回の調査では、その保存状態を確認するため、1Tを延長して、調査を行った。中堤盛土は、七層



第2図 二子山古墳各年度毎発掘調査位置 (1/1,500)



第3図 二子山古墳調査区平面図 (1/800)

から成り、一部暗黄褐色を帯びていたが、全般的には、ロームを含む暗褐色土が、水平に積み重なる形で盛られている(第8図)。なお盛土の最下層として表記したg層は、旧表土である可能性が高く、やや黒味を帯び、ロームから漸移的に移行変わっている。確実に盛土であるf層の下端は、標高一七・五〇崙であり、a層上端との比高差は一・一〇崙であった。築造時の中堤が、どれほどの削平を受けているか不明であるので、中堤の正確な高さを割り出すことは不可能である。しかし、遺存する盛土状況から判断すると、二子山の中堤は、少なくとも一・一〇崙以上の高さがあったといえる。

(三) 外堀

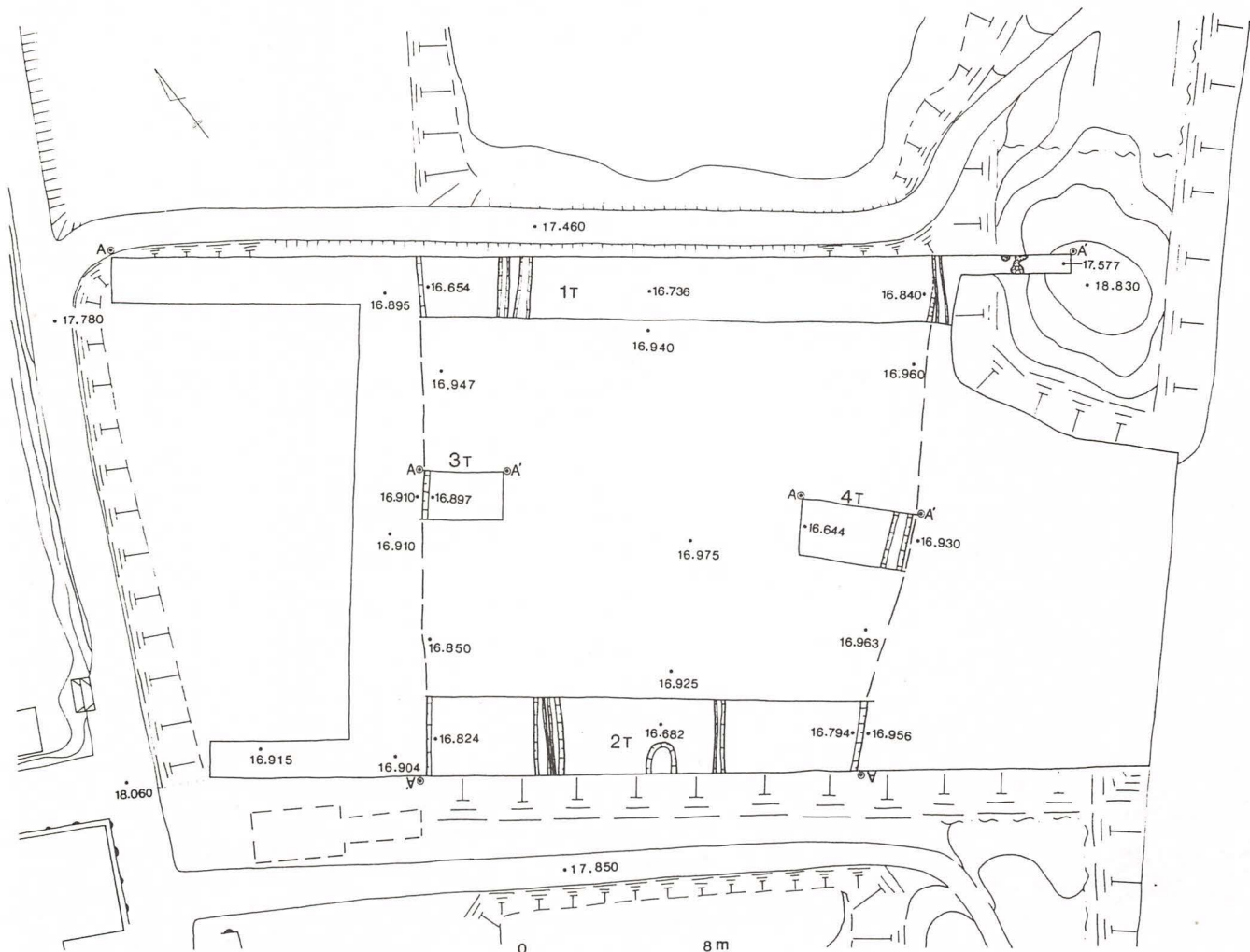
外堀は、A区、B区ともプラン確認後、トレンチ調査を行った。

A区では、中堤側立ち上がり部分に後世の溝が噛んでいたものの、遺構全体としての遺存状態は良好であった。

外堤側立ち上がり部分は、底部より一気に立ち上がるのではなく、テラス状の遺構を、一段経てから立ち上がっている。テラスは、確認面から一五センチ下位にあり、幅は六〇センチから一崙であった。

A区外堀の覆土は、ロームブロックを若干含む白色粘質土が、堀底付近に平均して見られる。その上層には、白色粘土ブロックを含む暗灰褐色粘質土が堆積している。外堀の深さは、確認面の一七センチから計測すると、中央付近の最も深い所で、約五〇センチ、平均すると三〇センチ前後であった。外堀の幅は、1Tで一八センチ、2Tで二二センチであった。

B区では、確認面まで、耕作による攪乱が、相当深くまで及んでいたため、中堤側立ち上がり付近での堀底は、かなり浅かった。1T南端付近には、外堤側立ち上がりと推定される部分が、わずかに立ち上がる状態で検出された。2Tでは、後世の攪乱によって、外堤側の立ち上がりは、検出できなかった。



第4図 二子山古墳A区平面図 (1/300)

B区では、1T・2Tとも、溝や土坑など後世の遺構が入り乱れていたため、外堀の形態は、明らかでなかった。

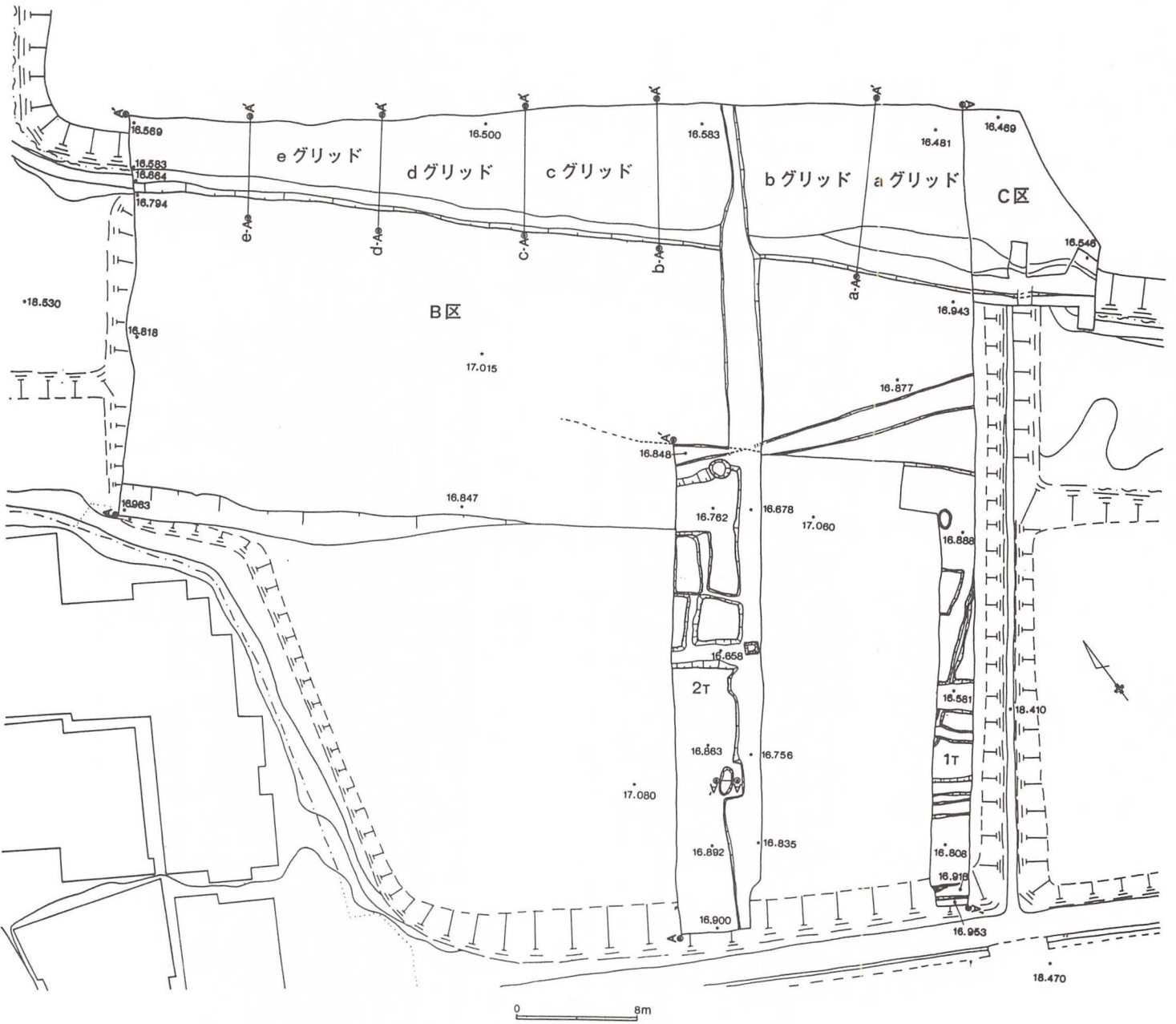
今回の調査で出土した遺物のうち、二子山古墳に関係するものは、ほとんどが円筒埴輪であった。埴輪片は、A区、B区とも、立ち上がり付近に多く、A区外堀中堤側立ち上がり付近とB区内堀a・bグリットで、特に集中して見られた。これらは、いずれも中堤から崩落したものと考えられる。中堤の幅が、確認面で一二層前後であることと、内堀、外堀内での出土状況を考慮すると、二子山の中堤には、少なくとも二列以上の円筒埴輪列が存在したと思われる。また、A区では、外堤側の立ち上がり付近にも、かなりの埴輪片が散乱しており、外堤上にも円筒埴輪列が存在した可能性が高い。

(四) その他の遺構

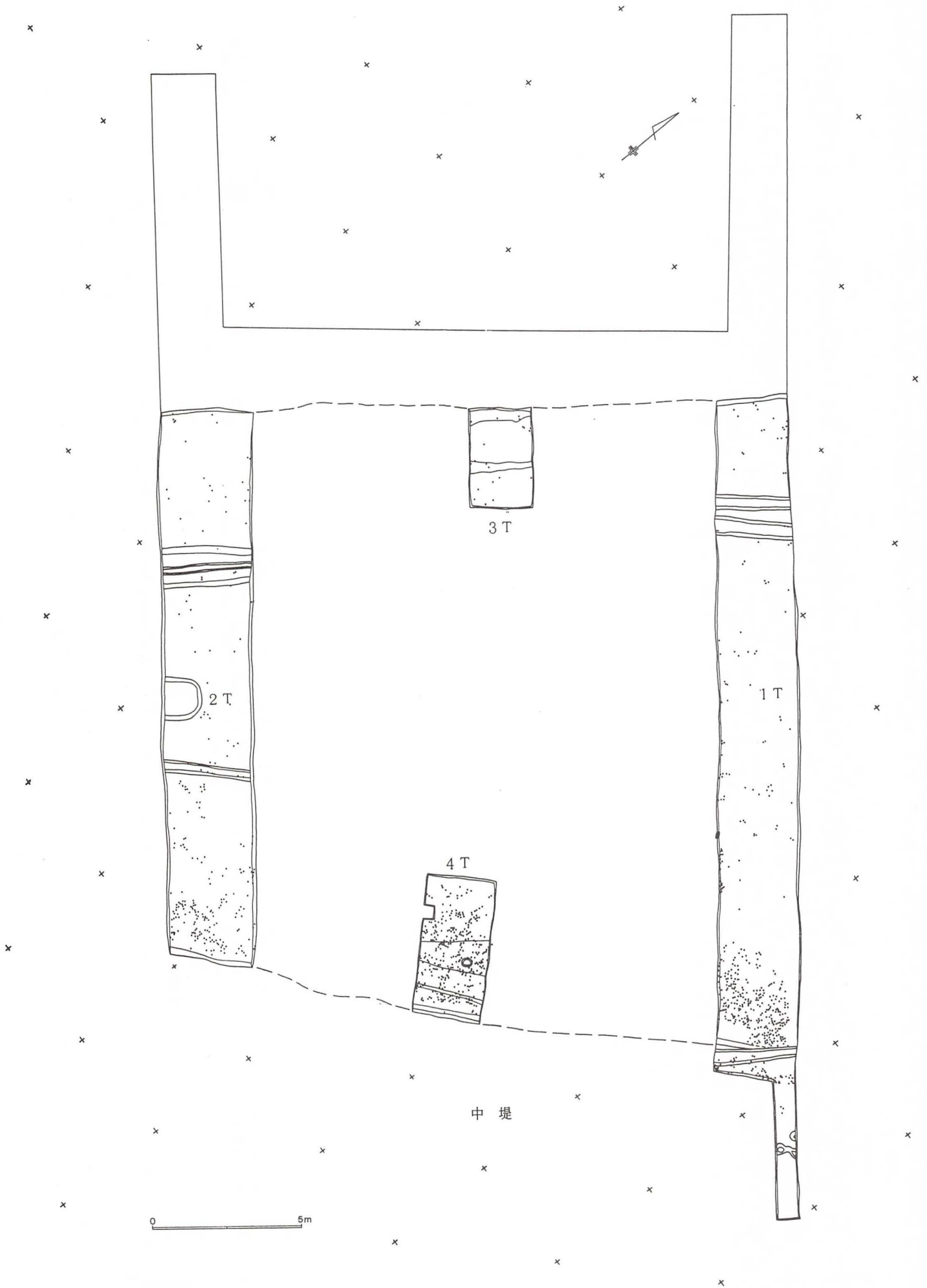
B区2Tの中央付近では、長軸一・八拵、短軸〇・八拵の小判型の土坑を検出した。そのほぼ中央部の覆土上には、直径一〇拵の強の球形の軽石が置かれていた。堀り底までは、予想外に浅く人骨らしきものや、副葬品の出土はなかったが、おそらく、中世以降の墓塚であろう。

その他、今回検出された遺構のうち溝は、水田耕作に伴うものがほとんどであり、陶磁器片や木製品を少量包含していた。土坑は、すべて性格不明である。いずれも、二子山古墳築造以降のものである。

(荒井 吉正)

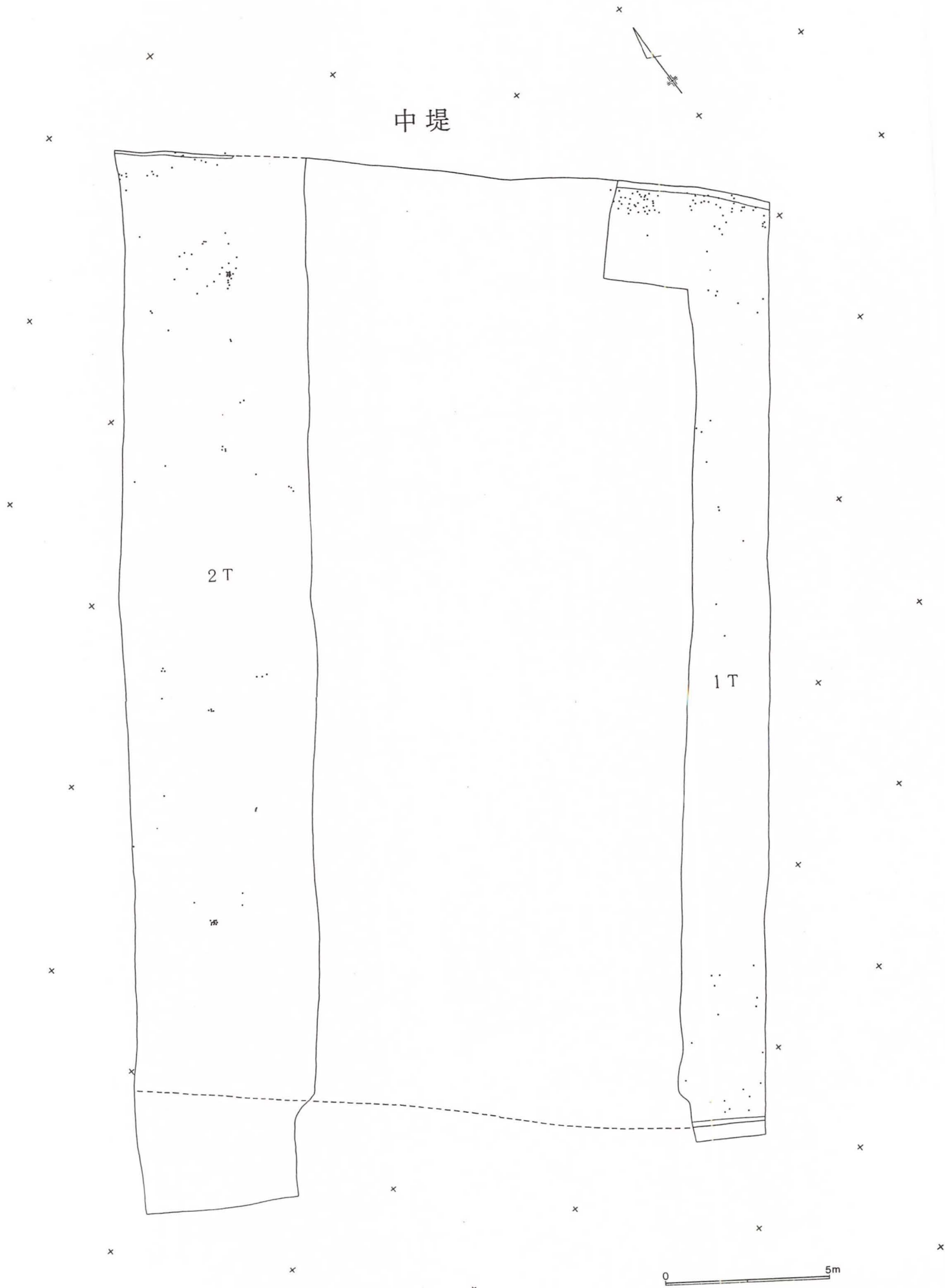


第5図 二子山古墳B・C区平面図 (1/400)

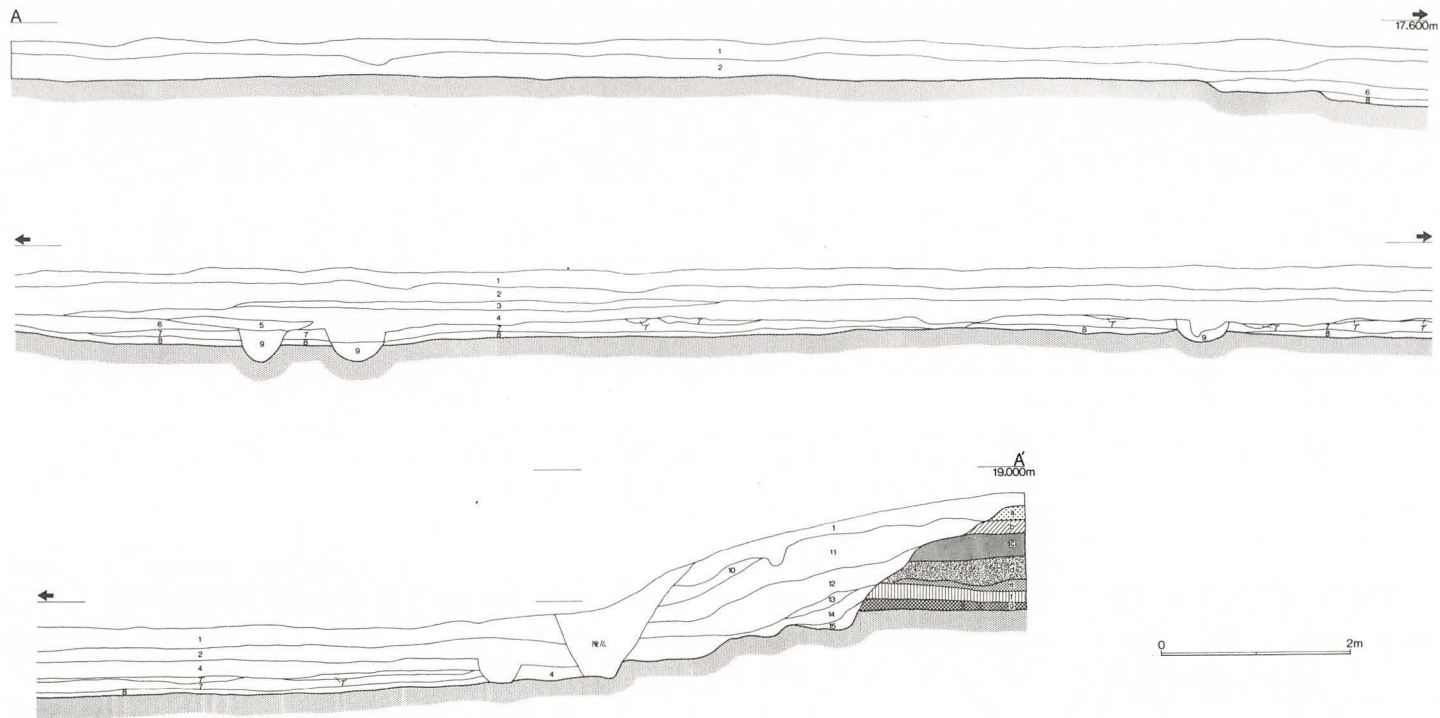


第6图 二子山古墳A区遺物出土状況図

中堤



第7图 二子山古墳B区外堀遺物出土状況図



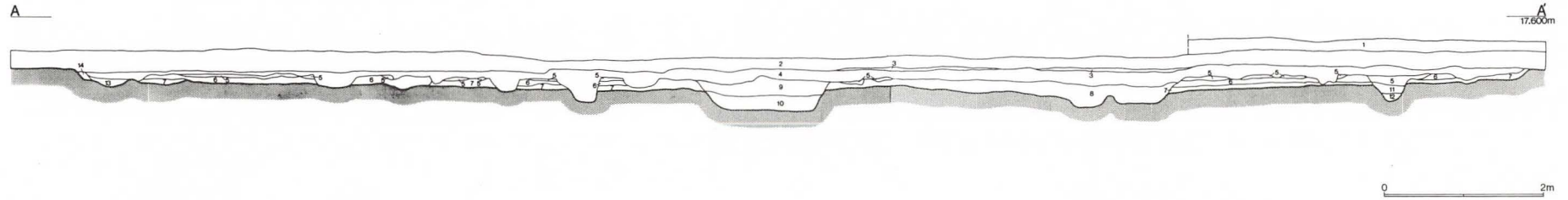
A区1T北壁土層説明

1. 表土
2. 灰褐色粘質土 粘性中、しまり弱。鉄分沈殿。3T第1層に対応。
3. 灰褐色粘質土 第2層に比べ、やや明。粘性しまり共に強。
4. 明灰褐色粘質土 粘性、しまり共に強。粒子密。赤色スコリアを若干含む。3T第2層に対応。
5. 暗灰褐色粘質土 粘性、しまり共に弱。
6. 黒色粘質土 粘性、しまり共に強。粒子密。径0.1mm前後の白色バミスを若干含む。
7. 暗灰褐色粘質土 粘性強、しまりやや強。粒子密。白色粘土ブロックを斑状に含む。
8. 白色粘質土 ロームブロックを若干含む。
9. 淡灰褐色粘質土 第4層に比べ、やや暗。
10. 暗褐色土 粘性弱、しまり強。
11. 暗褐色土 第10層に比べ、やや明。粘性しまり共に弱。径3.0mm前後のスコリアを若干含む。

12. 暗褐色土 粘性、しまり共に弱。ローム粒を若干含む。径0.1mm前後の白色バミスを若干含む。
13. 暗褐色土 しまり弱。粒子やや粗。スコリアを若干含む。
14. 暗褐色土 第13層に比べ、しまりやや強。粒子密。ローム粒、ロームブロックを若干含む。
15. 暗褐色土 第14層に比べ、しまりやや弱。粒子粗。ローム粒、ロームブロックを多量に含む。
- a. 暗褐色土 粘性弱、しまり強。径0.1mm前後の白色バミスを若干含む。
- b. 暗黄褐色土 粘性、しまり共に弱。ローム粒を多量に含む。ロームブロックを含む。
- c. 暗褐色土 粘性弱、しまり強。径1.0mm前後のローム粒を若干含む。
- d. 暗褐色土 c層に比べ、粘性、しまり共に弱。粒子やや粗。ローム粒、赤色スコリアを若干含む。
- e. 暗褐色土 粘性弱、しまり強。カーボンを若干含む。
- f. 暗褐色土 e層に比べ、しまり強。粒子密。径0.1-1.0mm前後のローム粒を斑状に含む。
- g. 暗褐色土 e層に比べ、しまり弱。粒子密。

中堤盛土

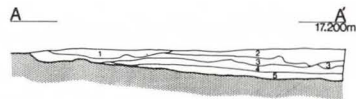
第8図 二子山古墳A区第1トレンチ土層断面図



A区2T南壁土層説明

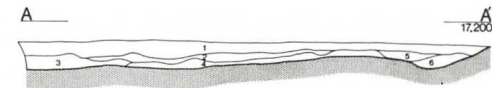
1. 表土層。
2. 灰褐色粘質土。 旧水田面。粘性強、しまり弱。カーボン粒を若干含む。1T第2層に対応。
3. 灰褐色粘質土。 第2層に比べ、やや明。粘性しまり共に強。1T第3層に対応。
4. 明灰褐色粘質土。 粘性、しまり共に強。粒子密。赤色スコリアを若干含む。1T第4層に対応。
5. 暗灰褐色粘質土。 粘性強、しまりやや強。粒子密。白色粘土ブロックを塊状に含む。白色バミスが多量に含む。1T第7層に対応。
6. 暗灰褐色粘質土。 白色バミスを含まない以外は第5層と同じ。1T第7層に対応。
7. 白色粘質土。 ロームブロックを若干含む。1T第8層と同じ。

8. 暗灰褐色粘質土。 粘性強、しまり弱。鉄分を多く含む。
9. 暗灰褐色粘質土。 第8層に比べ、やや明。
10. 暗灰褐色粘質土。 第9層に比べ、やや暗。
11. 暗灰褐色粘質土。 第5層に比べ、やや暗。粒子密。白色粘土ブロック、ローム粒を若干含む。
12. 暗灰褐色粘質土。 第11層に比べ、暗。
13. 明灰褐色粘質土。 第4層に比べ、粘性、しまり共に欠ける。
14. 灰褐色粘質土。 粘性しまり共に弱。ローム粒を多量に含む。



A区3T北壁土層説明

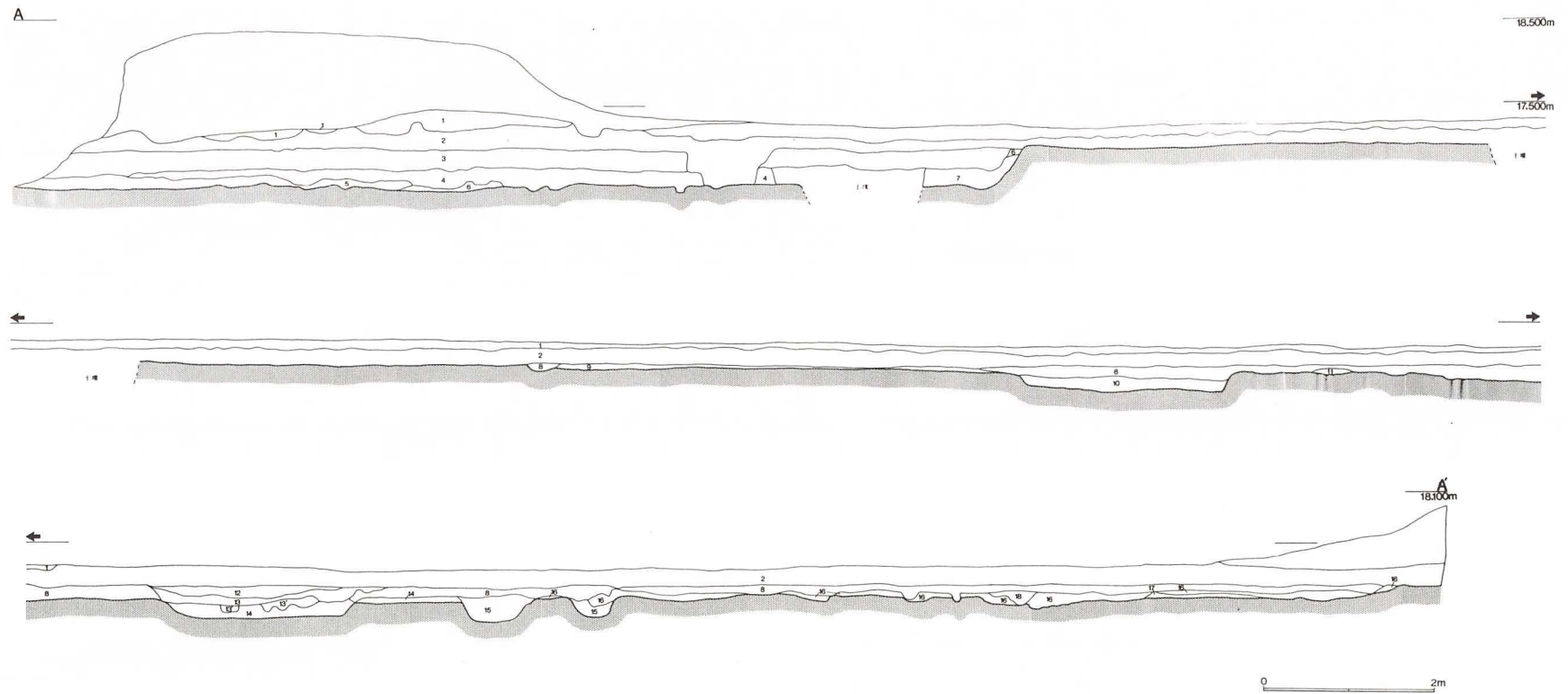
1. 灰褐色粘質土。 粘性中、しまり弱。鉄分沈殿。
2. 明灰褐色粘質土。 粘性、しまり共に強。粒子密。赤色スコリアを若干含む。4T第1層に対応。
3. 暗褐色粘質土。 粘性、しまり共に強。粒子やや粗。白色バミスが多量に含む。
4. 暗褐色粘質土。 第3層に比べ、粘性、しまり共に強。白色バミスは含まない。
5. 白色粘質土。 粘性、しまり共に強。暗褐色粘質土のブロックを若干含む。



A区4T北壁土層説明

1. 明灰褐色粘質土。 粘性、しまり共に強。粒子密。赤色スコリアを若干含む。
2. 灰褐色粘質土。 径0.1mm前後の白色バミスが多量に含む。
3. 灰褐色粘質土。 第2層に比べ、粘性、しまりやや弱。白色粘土ブロックを若干含む。
4. 灰褐色粘質土。 粘性、しまり共に第3層と同じ。白色粘土ブロックを多量に含む。
5. 灰褐色粘質土。 粘性、しまり共に中。径0.1mm前後の白色バミスを若干含む。
6. 灰褐色粘質土。 粘性、しまり共に弱。ローム粒を多量に含む。

第9図 二子山古墳A区第2～4トレンチ土層断面図

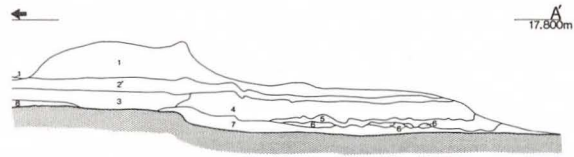
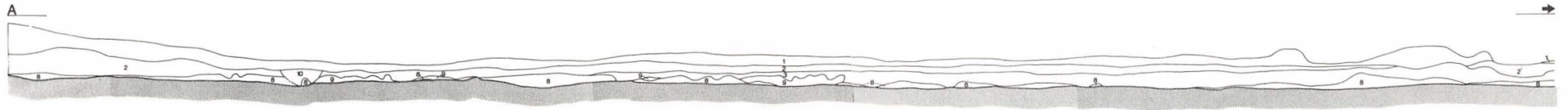


B区東壁土層説明

- 1. 暗褐色土。 粘性、しまり共に強。白色バミスを若干含む。径1.0mmのスコリアを若干含む。
- 2. 灰褐色粘質土。 粘性、しまり共に強。粒子密。径0.1mm前後の白色バミスを含む。
- 3. 暗褐色土。 第1層に比べ、やや明。粘性強、しまり強。白色バミスを微量に含む。
- 4. 黒色粘質土。 粘性強、しまりやや弱。白色バミスを若干含む。鉄分が斑状に沈殿する。
- 5. 黒色粘質土。 第4層に比べ、やや明。粘性、しまり共にやや欠。白色粘土ブロックを若干含む。
- 6. 暗褐色土。 黒色粘土ブロックを若干含む。
- 7. 黄褐色土。 白色粘土ブロックを若干含む。粘性弱、しまりやや弱。
- 8. 暗褐色土。 粘性中、しまり弱。
- 9. 黄褐色土。 粘性、しまり共にやや欠ける（地山の可能性有り）。

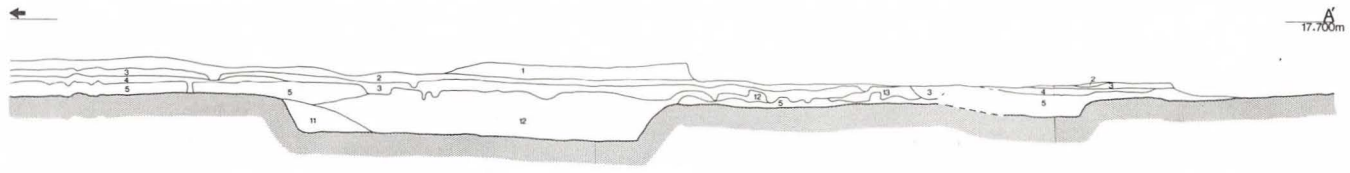
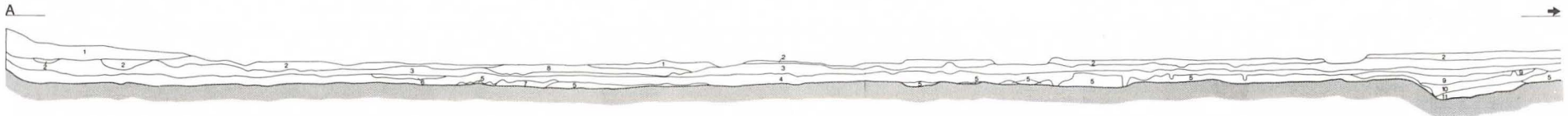
- 10. 暗褐色粘質土。 粘性強、しまり弱。鉄分を斑状に含む。
- 11. 暗褐色土。 第8層に比べ、暗。径0.1mm前後の白色バミスを微量に含む。
- 12. 青灰色粘質土。 粘性、しまり共に強。粒子密。鉄分が沈殿する。
- 13. 暗青灰色粘質土。 第12層に比べ、しまりやや弱。
- 13. 暗青灰色粘質土。 第13層に比べ、粘性弱、しまり弱。ローム粒を含む。
- 14. 暗褐色土。 粘性、しまり共にやや欠ける。ローム粒を含む。
- 15. 暗褐色土。 粘性、しまり共に弱。粒子粗、溝の埋土。
- 16. 白色粘質土。 上部に黒色粘質土が堆積。
- 17. 暗褐色土。 第8層に比べ、やや暗。鉄分を沈殿する。
- 18. 白色粘質土。 第16層に比べ、白色粘土の量が多い。

第10図 二子山古墳B区東壁土層断面図



B区西壁土層説明

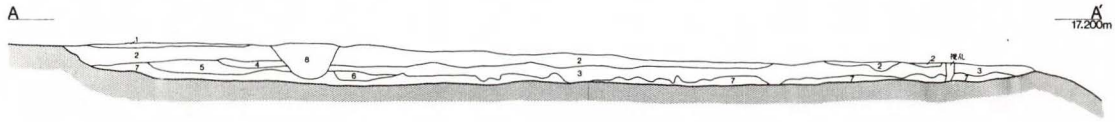
- | | |
|--------------|--|
| 1. 暗褐色土. | 耕作土. |
| 2. 暗青灰色粘質土. | 粘性、しまり共に強。粒子密、径0.1mm前後の白色バミスが多量に含む。ローム粒、カーボン粒を若干含む。鉄分洗脱。 |
| 3. 暗青灰色粘質土. | 第2層に比べ、粘性、しまり共に強。他は第2層と同じ。 |
| 4. 褐色土. | 第2層に比べ、白色バミスは若干少ない。ロームブロックを含む。 |
| 5. 黒色粘質土. | ローム粒を多量に含む。粘質やや欠、しまり強。粒子密。黒輪を含む。 |
| 6. 白色粘土. | ローム粒を若干含む。白色粘土を斑状に含む。 |
| 7. 暗褐色土. | 粘性やや有、しまり強。粒子やや粗。立ち上がり付近によくみられる。ロームブロックを多量に含む。 |
| 8. ローム. | |
| 9. 黄褐色土. | ロームブロックを多量に含む。暗褐色土を斑状に含む。 |
| 10. 暗青灰色粘質土. | 白色バミスを含まない点以外は第2層と同じ。 |



B区2T土層説明

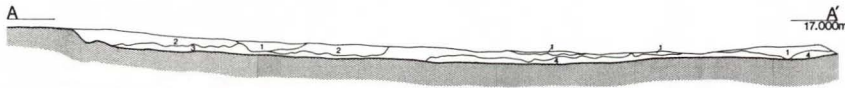
- | | | | |
|-------------|------------------------|-------------|----------------------------|
| 1. 暗褐色土. | 耕作土. | 8. 暗灰褐色粘質土. | 第3層に比べ、やや暗。白色バミスを若干含む。 |
| 2. 暗灰褐色粘質土. | 第3層に比べ、しまりやや弱。 | 9. 灰色粘質土. | 粘性、しまり共に強。粒子密。 |
| 3. 暗灰褐色粘質土. | 粘性、しまり共に中。粒子密。鉄分を多く含む。 | 10. 灰褐色粘質土. | 第9層に比べ、粘性、しまり共にやや弱。 |
| 4. 暗灰褐色粘質土. | 第3層に比べ、ローム粒を多量に含む。 | 11. 暗褐色土. | 黄色スコリア、ローム粒を含む。 |
| 5. 黄褐色土. | ローム土層。 | 12. 攪乱土. | |
| 6. 暗灰褐色粘質土. | カーボン粒、白色バミスを若干含む。 | 13. 暗灰褐色土. | 白色バミスが多量に含む。白色粘土ブロックを若干含む。 |
| 7. 暗灰褐色粘質土. | 第4層に比べ、粘性、しまり共に若干欠ける。 | | |

第11図 二子山古墳B区西壁・第2トレンチ土層断面図



B区内堀 a グリッド西壁土層説明

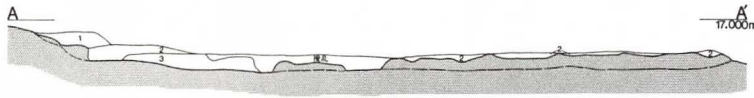
- | | | | |
|------------|-------------------------------------|-------------|--|
| 1. 暗灰褐色土、 | 粘性、しまり共に弱。粒子密。 | 5. 灰色粘土、 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 2. 暗灰褐色土、 | 粘性、しまり共に強。粒子密。鉄分およびローム粒、白色テフラを若干含む。 | 6. 灰褐色粘質土、 | 粘性やや弱。粒子密。ローム粒を多量に含む。 |
| 3. 暗灰褐色粘土、 | ロームブロックを斑状に含む。 | 7. 褐色土 | 粘性、しまり共に弱。粒子やや粗。ロームブロック、ローム粒、赤色スコリア、白色粘土を若干含む。 |
| 4. 暗灰褐色粘土、 | 第3層に比べ、粘性、しまり共に強。白色粘土ブロックを含む。 | 8. 青灰褐色粘質土、 | 粘性、しまり共に強。粒子密。径0.1mmの白色テフラ、径3.0mmのカーボン粒を若干含む。 |



B区 b グリッド西壁土層説明

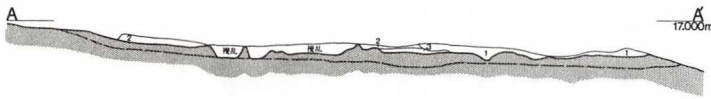
1. 灰褐色粘土、粘性、しまり共に強。粒子密。
2. 灰色粘質土、第1層に比べ、粘性、しまり共にやや弱。鉄分沈殿。径1.0mm前後の黄色スコリア、径3.0mm前後のカーボン粒を若干含む。
3. 暗褐色土、粘性やや弱。粒子やや粗。ロームブロックを多量に含む。白色粘土ブロックを少量含む。
4. 暗褐色土、第3層に比べ、やや暗。ロームブロックを多量に含む。内堀の底上と同じ。

0 2m



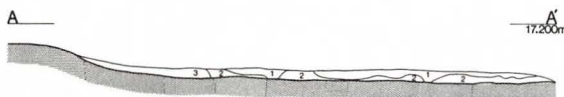
B区内堀 C グリッド西壁土層説明

1. 暗灰褐色土、粘性、しまり共にやや中。粒子密。鉄分沈殿。ローム粒を斑状に含む。径1.0mm前後の赤色スコリアを微量に含む。
2. 灰色粘土、鉄分が多く沈殿。ローム粒を斑状に含む。
3. 暗褐色土、しまり強。粒子やや粗。ロームブロックを斑状に含む。内堀底土と同じ。
1. 地山層、ロームブロックと黒色土の混合層。



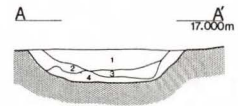
B区内堀 d グリッド西壁土層説明

1. 暗青灰褐色土、粘性、しまり共に弱。径2.0mm前後のローム粒を多量に含む。白色バミスを微量に含む。
2. 暗青灰褐色土、第1層に比べ、粘性、しまり共にやや強。第1層よりやや暗。径1.0mm前後の赤色スコリアを含む。
3. 灰色粘土、粘性、しまり共に強。ロームブロックを斑状に含む。白色バミスを若干含む。
1. 地山層、ロームブロックと黒色土の混合層。



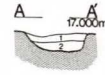
B区 e グリッド西壁土層説明

1. 暗褐色土、粘性、しまり共にやや弱。径1.0cm前後のロームブロックを斑状に含む。
2. 暗褐色土、第1層に比べ、粘性、しまり共にやや強。第1層より暗。ロームブロックを含む。内堀底土に似る。白色粘土ブロックを含む。
3. 暗褐色土、粘性弱、しまり強。第2層に極めて類似する。



B区 2 T 内土層土層説明

1. 明青灰色砂質土、粘性強、しまり欠。ロームブロックを多量に含む。
2. 暗青灰色砂質土、第1層に比べ、粘性弱、しまり強。ロームブロックを多量に含む。
3. 暗青灰色砂質土、粘性強、しまり欠。ロームブロックを多量に含む。第1層に類似。
4. 暗褐色土、粘性欠、しまり強。径1.0cm前後のロームブロックを若干含む。外堀底面の土と類似しているが区別できる。



B区 2 T 溝 (A-A') 土層説明

1. 灰褐色粘質土、粘性強、しまり弱。
2. 灰褐色粘質土、第1層に比べやや暗。白色粘土ブロックを若干含む。



B区 2 T 溝 (B-B') 土層説明

1. 灰褐色粘質土、粘性強、しまり弱。
2. 灰褐色粘質土、第1層に比べやや暗。白色粘土ブロックを若干含む。

第12図 二子山古墳B区 a～eグリッド、土層、溝、土層断面図 (1/80)

二 遺 物

平成二年度の出土遺物には、円筒埴輪片、形象埴輪片、須恵器片などがある。大半は円筒埴輪片であり、総重量は一七三・八六gである。埴丘から表採した91〜100を除き、周堀からの出土であり、原位置での検出はない。

以下、種類別に遺物の概要を述べるが、形象埴輪を除く一点ごとの詳細については、観察表を作成してある。なお、各出土位置図及び写真図版の遺物に付した番号は、実測図の番号と共通である。

(一) 円筒埴輪 (第13〜18図)

胎土の特徴、焼成の程度、色調の差及び内外面の調整技法、凸帯の形状等の観察結果をもとに分類し、説明を進める。瓦塚古墳の円筒埴輪と同じような傾向を示すため、A₁類、A₂類、B類として説明する。

A₁類

極めて鮮やかな赤色を呈し、土色帖の赤色(10R4/8・5/8・7.5R4/8)または明赤褐色(2.5YR5/6・5/8)が主体で、他に橙色、赤橙色がある。小礫が多く、白色パミスを相当量含んでいる。焼成は極めて良く、堅緻で、表面に光沢をもつものが多い。比較的厚手の製作である。

外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケを施し、ハケメの荒いものが多い。100は表採品であるが、第四条凸帯まで残存している。底部径三五・五^{セリ}、体部径三三^{セリ}、残存高四五^{セリ}である。外面はタテハケ、内面はナメハケ及び一部指頭圧痕を施す。直線的な器形をもち、底部はかなり歪んでいる。凸帯はつぶれたM字形であり、その間隔は狭い。多条凸帯の円筒埴輪になると考えられる。透孔は円形を四段目と五段目に、九〇度ずらして二個穿たれている。91は口縁部の破片である。外面はナナメハケ、内面はヨコ

ハケを施す。内面には格子状の窯印が線刻されている。

凸帯は断面台形のものが多い。透孔は円形である。

A₂類

橙色(2.5YR6/8)が主体で、他に2.5YR6/6・7/6・5YR6/6・7/6・7/8など)に対応している。やや小礫を含み、焼成は良好である。A類に比べ、薄手の製作であるものが多い。98は底部の破片であるが、外面タテハケ、内面ナナメハケを施し、全体に薄手のつくりである。器形などは分からないが、おおむね凸帯は台形、透孔は円形を穿つ。

B類

浅黄橙色(7.5YR8/4・10YR8/3・8/4)が主体で、他に橙色や灰色、にぶい黄橙色などがある。焼成は良好であり、全体的に丁寧なつくりのものが多い。胎土中に、いわゆる白色針状物質を含むものがあり、B類の特徴となっている。凸帯は台形のものが多い。透孔は長方形を呈するもの(4・10・13・16・33・55・82・93・94)があり、B類のみに確認できる特徴である。

(二) 形象埴輪 (第18図)

形象埴輪は破片のみが出土し、全体を復原できる資料はない。以下、種類ごとに説明を進めていく。

人物埴輪 (103)

人物の顎の部分である。淡橙色(5YR8/4)を呈し、石英、長石、白色パミスを含む。焼成は良好である。外・内面ともにナデ調整であり、顎部は粘土板を貼り付けている。

馬形埴輪 (102・105)

102は鏡板の部分であり、f字形鏡板を表現したものである。表面には

円形浮文を付け、鋳を表現している。赤色(10R5/8)を呈し、チャート、長石、白色パミスを含む。焼成は良好である。一部にハケメが残るものの、全体にナデ調整で成形している。

105は顔面部の側面であり、二本の粘土紐で面繋と手綱を表現している。橙色(2.5YR6/8)を呈し、チャート、火山ガラス、白色パミス、角閃石の粗い砂粒を多く含む。焼成は極めて良好である。外面ヨコハケ(1・1セグ/一〇本)、内面タテハケ(1・2セグ/一〇本)後ヨコナデを施す。

不明形象埴輪(101・104・106・107)

101は動物埴輪などの脚部などが考えられる。橙色(2.5YR6/8)を呈し、石英、長石、白色パミスを含む。焼成はやや軟質である。外面タテハケ(1・3セグ/一〇本)、内面ナナメハケ及びヨコナデを施す。

107は表面に直弧文があり、靱などの破片と考えられる。橙色(2.5YR6/8)を呈し、長石、白色パミス、角閃石、頁岩の粗い砂粒を比較的多く含む。焼成は良好であり、外面タテハケ(1・1セグ/一〇本)、内面ナナメハケ(1・4セグ/一〇本)を施す。

104は板状の粘土を本体にナデつけて接着していたらしく、剝離痕がある。橙色(5YR7/6)を呈し、チャート、長石、火山ガラス、白色パミス、酸化鉄粒の粗い砂粒を多く含む。焼成は普通である。赤彩の塗布が確認される。部位不明である。

106はヘラ工具によって楕円形を切り取ったものである。明赤褐色(2.5YR5/6)を呈し、白色パミス、酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。画面ともにナデの跡を残している。円筒もしくは形象埴輪の透孔の切り損ない部分である可能性もある。

(日 高 慎)

(三) 須 恵 器

ほとんどが昭和六三年度および平成二年度に埴造出し付近から表採されたものである。これらは胎土・焼成に強い共通性が認められる。胎土は精選され、ほとんど砂粒を含まない。焼成はいずれも堅緻で、高温焼成のためか、外面に緑黒色のガラス質が釉出する例が多く、灰を被る例も少なくない。色調は灰色を基調とするが、器肉は紫灰色もしくは赤灰色を呈する。以下に器種別の製作技法等の特徴を掲げる。

壺(108~110)

いずれも薄手で丁寧な製作である。108は復原口径一五セグの口縁部で、口唇部をつまみ上げて尖らせている。体部は110のように平行叩きの後にカキメ調整を加えるものと、109のように叩きの使用が明らかでないものがある。

甕(111~119・124・128)

111は口縁部直下に貼付け凸帯を付するもので目を引く。112~115には平行する凹線が巡る。113と115には櫛歯刺突文が施されている。体部は叩き具に所謂格子目状の原体を用いる。内面の当て具痕を残すものと、半スリケンとがある。

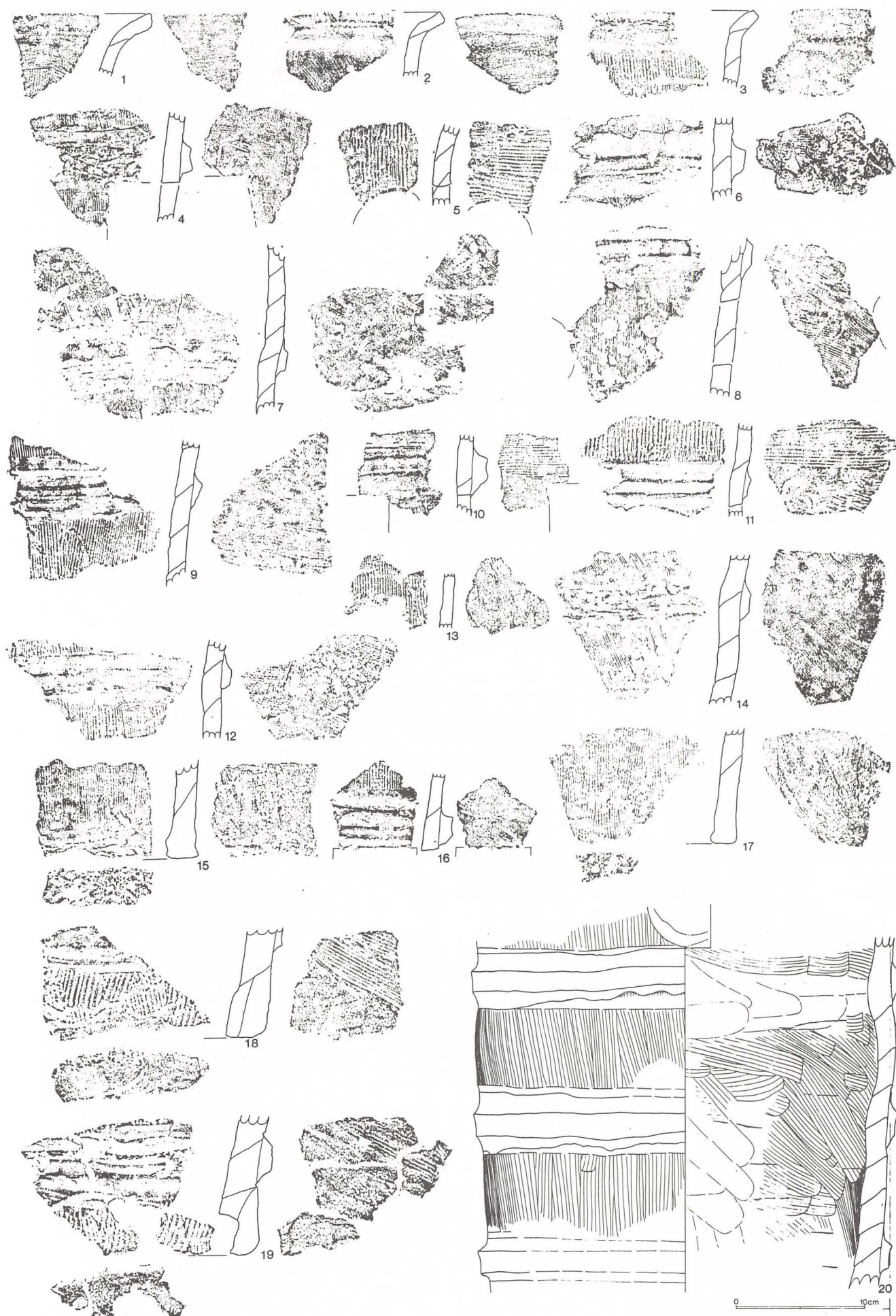
器台(120~123)

いずれも脚台部の破片である。120は三角形透しを四方向に穿つ。カキメ調整後、三段のN字状波状文を施す。123の透孔は上下直列式である。

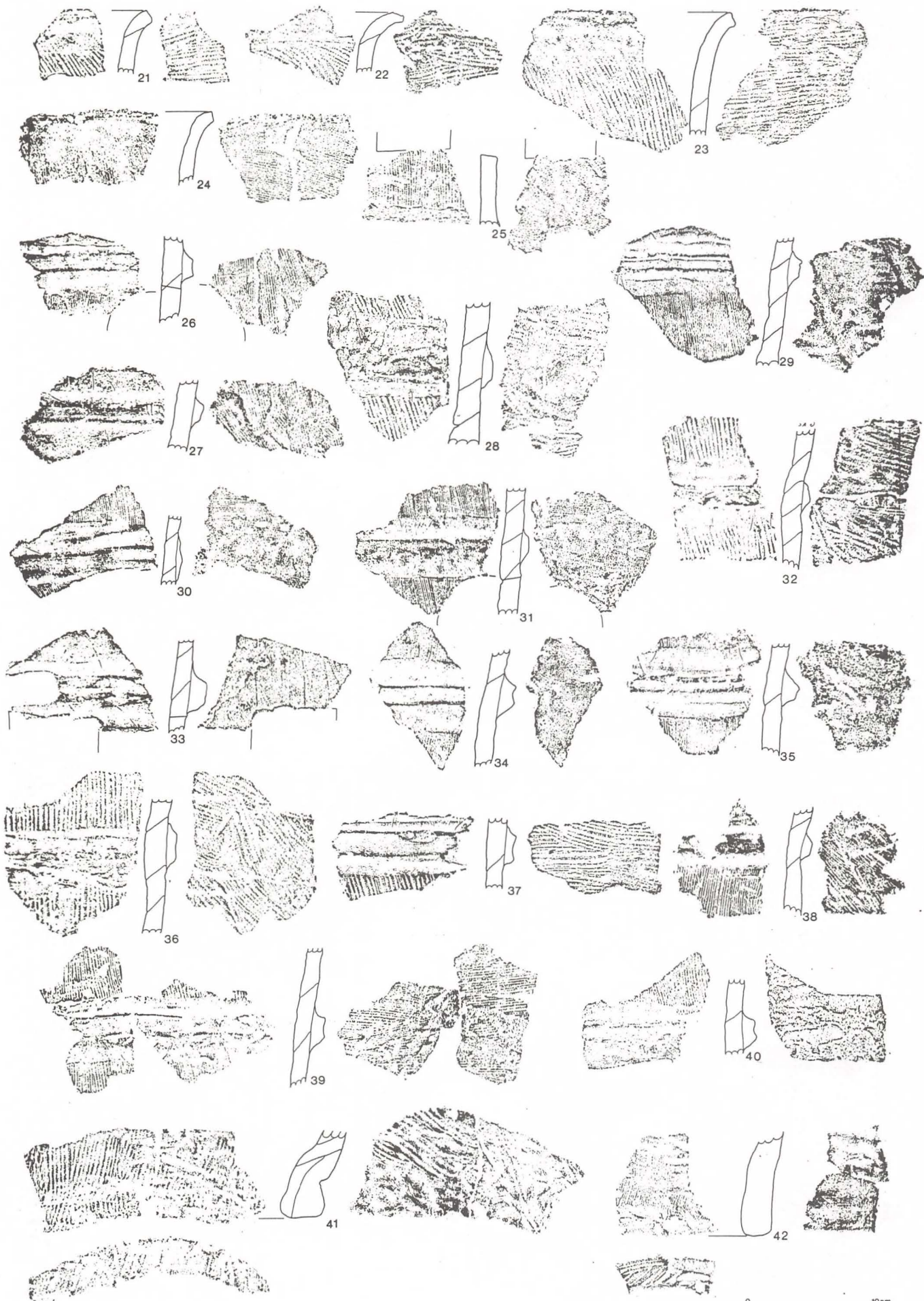
埴瓶(125~127)

125は頸部の付く体部で、復原径は二〇セグ。同心円状のカキメ調整を施す。126はカキメが粗く、別個体である。

(若松 良一)

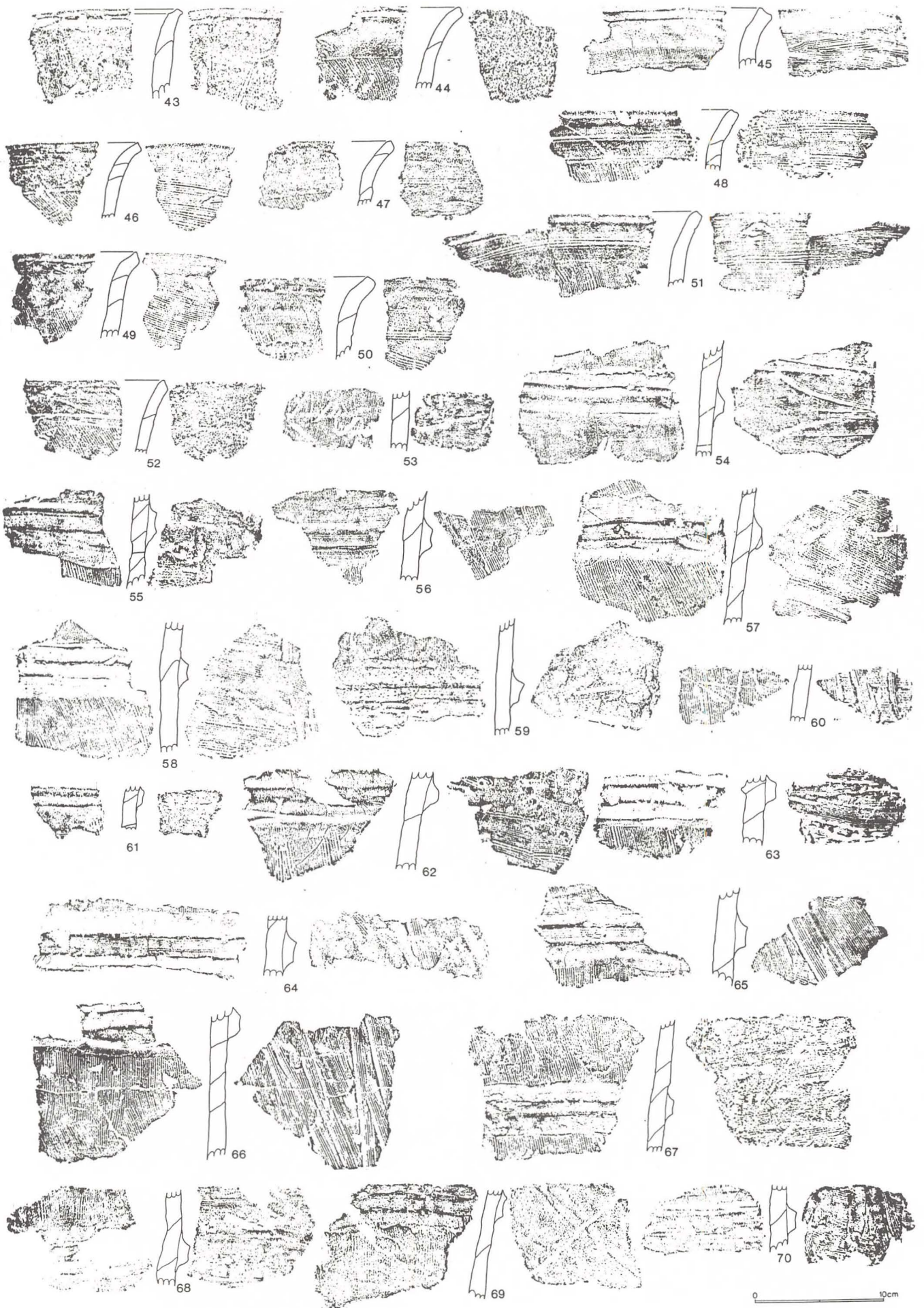


第13图 二子山古墳出土遺物 1

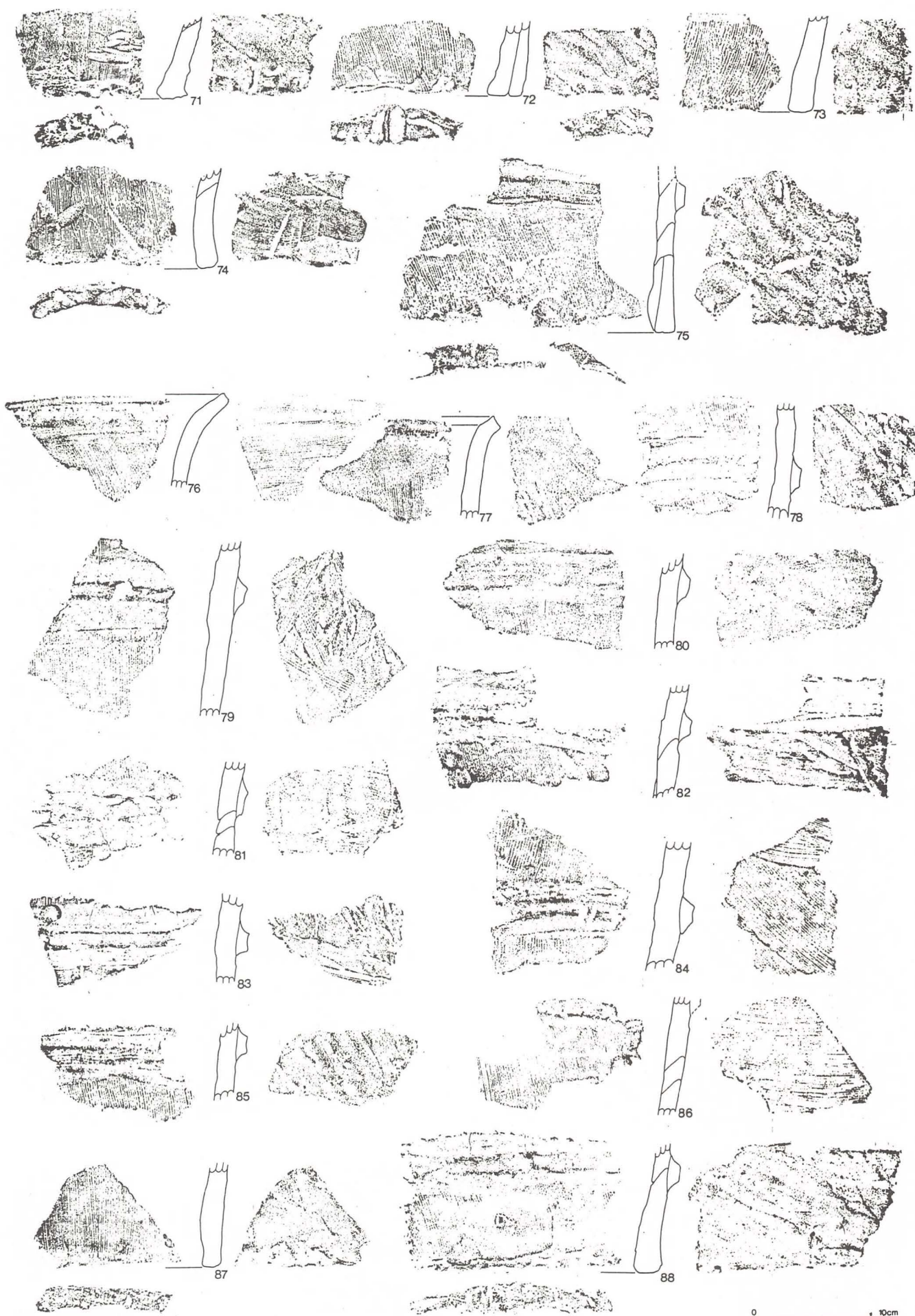


0 10cm

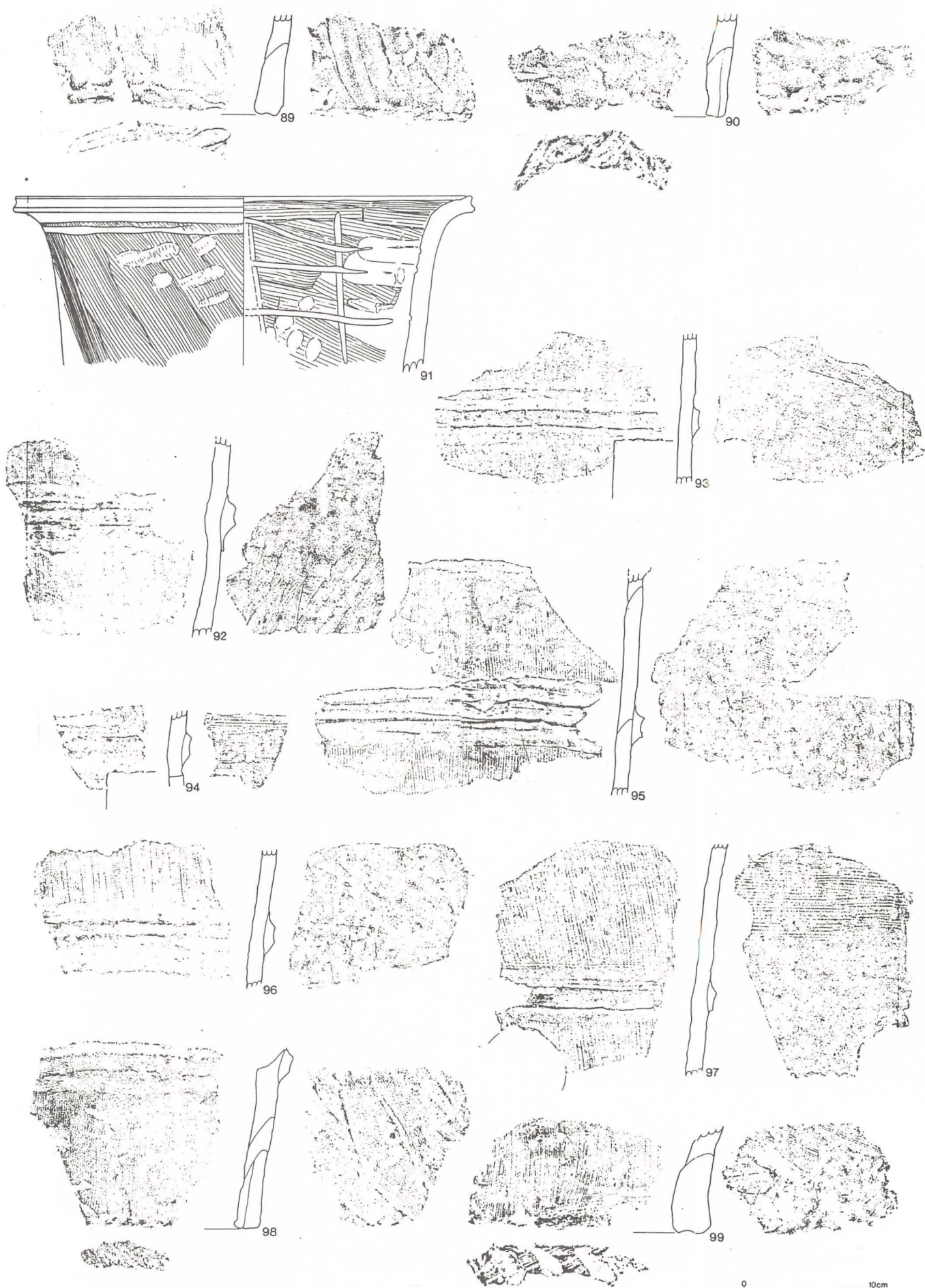
第14图 二子山古墳出土遺物 2



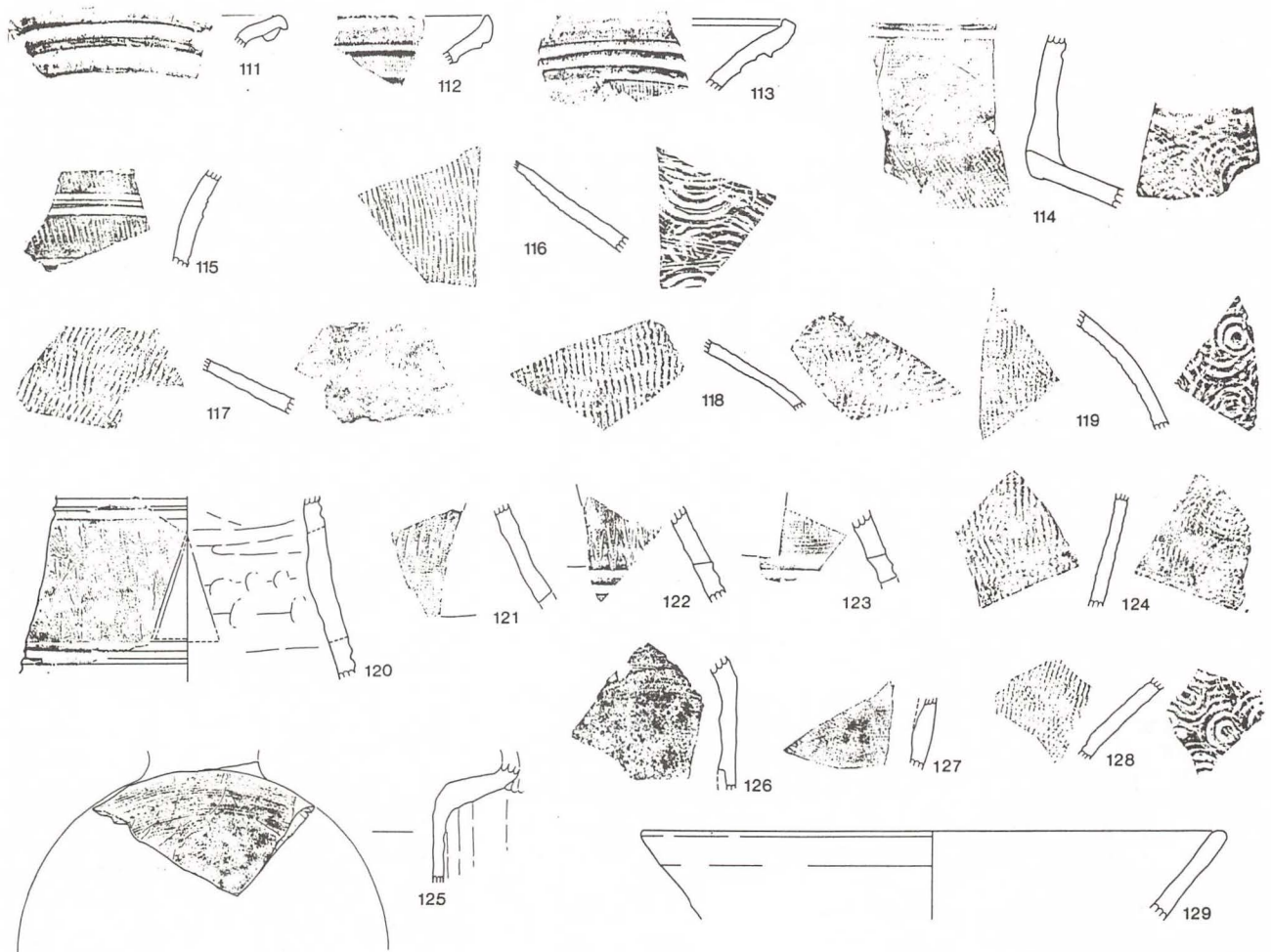
第15图 二子山古墳出土遺物 3



第16图 二子山古墳出土遺物 4



第17图 二子山古墳出土遺物 5



第18图 二子山古墳出土遺物 6

二子山古墳出土遺物観察表

凡 例

- 胎土に含まれる鉱物の名称は次のとおり、略称とした。
チャート→チ、長石→長、火山ガラス→火、輝石→輝、角閃石→角、雲母→雲、金雲母→金、石英→石、頁岩→頁、凝灰岩→凝、片岩→片、白色軟質粒→白、酸化鉄粒→酸、白色バミス→バ、白色針状物質→針、黒色砂粒→黒
- 含有鉱物の内、特に顕著に含まれるものについては、アンダーラインを付した。
>
- 色調は新版標準土色帖（小山・谷原、二本色研、昭和45年）による。
- ハケメは比較に便利のように、10本あたりの幅（cm）で表示した。
- 形象埴輪については、本文中に詳述するので省略した。

番号	種 別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
1	円筒埴輪 口 縁 A ₂ 類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。口縁端部はヨコナデ。	石、バ、黒	普通。 橙(2.5YR 6/8)	内外 1. 7	A区4T
2	" A ₁ 類	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。口縁端部はヨコナデ。	石、長、バ、酸、黒	普通。 赤(10R 5/8)	内外 1. 6	"
3	" B類	外面タテハケ、内面ヨコナデ。口縁端部はヨコナデ。	小礫を若干含む。 石、チ、長、火、酸を比較的多く含む。	普通(やや軟質)。 浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	外 2. 6	"
4	円筒埴輪 体部B類	外面タテハケ、内面縦位ナデ。凸帯はM字形。透孔は方形。凸帯はM字形。	石、チ、長、バ、火、黒	普通。におい橙 (7.5 YR 7/4)	外 1. 5	"
5	" B類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。透孔は円形	石、チ、針、火	普通。 橙(2.5YR 6/8)	内外 2. 8	"
6	" B類	外面タテハケ(二次調整タテハケ有り)、内面ヨコハケ及び斜位ナデ。凸帯は台形。	石、チ、針、火	普通。浅黄橙 (10R 8/4)	内外 1. 8	A区4T外堤 寄り半分
7	" A ₁ 類	復原径36.0cm。外面ナナメハケ、内面ナナメハケ及び斜位ナデ。凸帯は台形。	石、長、バ、酸、黒	普通。 赤(10R 5/8)	内外 1. 3	A区4T
8	" A ₂ 類	復原径24.0cm(1/15)。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。透孔は円形。	石、長、バ、酸、黒	普通。 橙(2.5YR 6/8)及び 赤(10R 4/8)	内外 1. 5	A区4T外堤 寄り半分
9	" A ₁ 類	復原径34.0cm(1/12)。外面タテハケ、内面ナナメハケ及び凸帯裏面ヨコナデ。凸帯は台形。	石、長、バ、酸、黒	普通。 赤(10R 5/8)	内外 1. 8	A区4T
10	" B類	外面タテハケ、内面ヨコハケ及びヨコナデ。凸帯は均整のとれたM字形。透孔は方形。	石、長、バ、チ、黒	堅緻。浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	外 1. 6 内 2. 0	A区1T
11	" A ₁ 類	復原径31.0cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ及び凸帯裏面ヨコナデ。凸帯はM字形。透孔は円形。	石、長、バ、酸を比較的 多く含む。	堅緻。 赤(10R 5/8)	外 3. 0 内 2. 2	A区4T
12	" A ₁ 類	復原径30.0cm(1/10)。外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。	石、長、バ、酸、火、黒	堅緻。 赤(7.5 R 4/8)	内外 2. 4	"
13	" B類	外面タテハケ、内面ヨコナデ。方形の透孔部分の破片である。	石、長、バ、チ、黒	やや軟質。浅黄橙 (10YR 8/4)	外 2. 2	A区1T
14	" A ₁ 類	復原径34.0cm。外面ナナメハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形。	石、長、酸、火	堅緻。 赤(10R 4/8)	内外 1. 3	A区4T
15	円筒埴輪 底 部 A ₂ 類	外面タテハケ、底端部ヨコナデ、内面縦位ナデ。	石、チ、長、火	普通。 橙(5YR 7/6)	外 1. 6	"
16	円筒埴輪 体部B類	外面タテハケ、内面ナデ。凸帯はM字形に近い。透孔は方形もしくは半円形。	石、チ、長、バ 砂粒を含む。	堅緻。浅黄橙 (7.5 YR 8/6)	外 1. 3	A区2T
17	円筒埴輪 底 部 A ₂ 類	外面タテハケ、内面斜位ナデ。	石、チ、長、バ、黒	堅緻。 橙(2.5YR 7/6)	外 1. 9	A区1T

番号	種 別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
18	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ及び底面付近はヨコナデ。凸帯は台形に近い。	石、チ、長、バ、黒	堅緻。明赤褐 (2.5YR 5/8)	外3.5 内2.4	A区1T外堀
19	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ及びヨコナデ。凸帯は台形に近い。	石、長、バ、酸、黒	堅緻。 赤 (10R 4/8)	内外 4.0	A区1T
20	円筒埴輪 体部 A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ及びナデ。凸帯はつぶれた台形で、凸帯間の長さ11.5cm。透孔は円形。	石、チ、長、バ、酸、火 黒	堅緻。明赤褐 (2.5YR 5/8)	外3.4 内2.8	A区1T外堀
21	円筒埴輪 口縁部 A ₁ 類	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。口縁端部はヨコナデ。	チ、石、酸、バ	やや軟質。 橙 (2.5YR 6/8)	外3.2 内3.0	A区1T
22	" A ₁ 類	外面ナナメハケ、内面ナナメハケ。口縁端部はヨコナデ。	チ、石、酸、バ	やや軟質。 赤橙 (10R 6/8)	内外 3.2	"
23	" A ₁ 類	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。口縁端部はヨコナデ。	長、石、酸、バ	硬質。明赤褐 (2.5YR 5/8)	内外 3.5	A区1T外堀
24	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。口縁端部はヨコナデ。	チ、長、石、バ、黒	やや軟質。 赤橙 (10R 6/8)	外1.9 内1.7	A区外堀 中堤寄り
25	円筒埴輪 体部 A ₂ 類	外面タテハケ、内面ヨコナデ。	チ、長、酸、バ、黒	やや硬質。 橙 (5YR 7/6)	外1.8	A区1T
26	" A ₂ 類	外面タテハケ、内面タテハケ。凸帯は均整のとれた台形。透孔は円形。	チ、長、石、バ、黒	やや硬質。 橙 (2.5YR 6/8)	外1.2 内1.0	"
27	" B類	外面は凸帯部のナデのみ確認。内面ナナメハケ。凸帯は台形。二度焼き可能性あり。	チ、長、バ、黒	硬質 灰 (N 6/)	内1.4	A区2T
28	" A ₁ 類	外面ナナメハケ、内面ナナメハケ後不定方向のナデ。凸帯はやや雑なつくりの台形。	長、酸、バ、黒	硬質 赤 (10R 4/8)	外3.2 内2.6	A区1T
29	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。凸帯の断面はM字形。	チ、長、バ、黒	硬質 赤 (10R 4/8)	内外 3.1	A区2T
30	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。凸帯は形はくずれているがM字形であろう。	チ、長、石、バ、黒	硬質 赤橙 (10R 6/8)	内外 1.3	"
31	" A ₂ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯はつぶれた台形。透孔は円形。	チ、長、角、バ	やや硬質 橙 (2.5YR 6/8)	内外 1.3	A区1T 拡張区
32	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形に近い。	チ、長、石、角、バ、黒	硬質 橙 (2.5YR 6/8)	外3.4 内4.8	A区1T 外堀
33	" B類	外面は凸帯部のナデのみ確認。内面縦位のナデ。凸帯は台形。透孔は方形か半円形。	チ、長、石、バ、黒	やや硬質 浅黄橙 (7.5YR 8/6)		A区2T
34	" B類	外面タテハケ、内面ナデ。凸帯は均整のとれたM字形である。	チ、長、角、バ、黒	やや硬質 浅黄橙 (7.5YR 8/6)	外1.3	"
35	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナデ。凸帯は台形。	チ、長、石、角、バ、黒	やや硬質 明赤褐 (2.5YR 5/8)	外1.1	"
36	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は、つぶれた台形。	長、石、角、酸、バ、黒	やや硬質 赤 (10R 5/8)	外3.3 内2.6	A区1T 外堀
37	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。凸帯はM字形。	角、酸、バ	硬質 赤 (10R 4/8)	内外 3.0	A区2T
38	" A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は、整った台形。	チ、長、角、酸、バ、黒	硬質 明赤褐 (2.5YR 5/8)	外1.5 内2.2	A区2T
39	" B類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は、均整のとれたM字形。	チ、長、バ、	やや硬質 浅黄橙 (7.5YR 8/4)	外2.3 内2.4	A区1T (拡張区を含む)

番号	種 別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
40	" B類	外面タテナデ、内面ヨコハケ。凸帯はM字形。	チ、長、バ、	やや硬質 浅黄橙 (7.5YR 8/4)	外1. 9	A区外堀 中堤寄り
41	円筒埴輪 体 部 A ₁ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。底面付近はヨコナデ。かなり変形している。	長、角、酸、バ	硬質。明赤褐 (2.5YR 5/8)	内外 3. 5	A区1T
42	" A ₂ 類	外面タテハケ、内面縦位ナデ、底面付近はヨコナデ。	長、石、角、酸、バ、黒	硬質。 橙(2.5YR 6/8)	外1. 3	A区2T
43	円筒埴輪 口 縁 部 A ₂ 類	外面タテハケ、内面休止ヨコハケ。口縁部はわずかに外反して開く。端部はつまみ出し、内側に段をもつ。	大粒の砂礫を大量に含む チ、長、バ、酸、火、輝	極めて堅緻。 橙(5YR 6/6)	内外 1. 7	B区外堀表探
44	" B類	外面ナナメハケ、口縁端部はヨコナデ。内面は剝離が著しい。	角、バ	やや軟質。にぶい黄 褐(10YR 5/3)	外1. 5	B区中堤表探
45	" B類	胎土が精選され、器内は黒味を帯び、調整の丁寧さで特筆される。外面タテハケ、内面ヨコハケ。口縁端部のヨコナデは息が長く、回転台使用の可能性がある。	礫を含まず、細粒のみ少量含む。(精選)。 バ、輝、長、酸、角	極めて堅緻。 淡黄(2.5Y 8/4) 灰(5Y 4/1)	外1. 0 内1. 2	B区調査区北 西
46	" B類	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。内外面ともに口縁端部はヨコナデ。	石、バ、輝、酸	堅緻。浅黄橙 (7.5YR 8/4)	外1. 5 内1. 6	B区内堀
47	" B類	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ、内外面ともに口縁端部はヨコナデ。	白色の物質が混入している。 石、バ、酸、長	堅緻。 灰白(5Y 7/1)	外1. 5 内1. 3	B区中堤
48	" B類	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。内外面ともに口縁端部はヨコナデ、外面には2本の沈線有り。	石、バ、酸、黒	堅緻。浅黄橙 (10YR 8/4)	外1. 5 内1. 3	B区内堀
49	" B類	内外面ともにナナメハケ、口縁端部はヨコナデ。	石、バ、長、酸、黒	堅緻。浅黄橙 (10YR 8/4)	外1. 5 内1. 4	B区中堤表探
50	" B類	内外面ともにナナメハケ、口縁端部はヨコナデ。	石、バ、長、輝、酸、黒	堅緻。浅黄橙 (7.5YR 8/4)	外1. 3 内1. 4	B区内堀
51	" B類	外面ナナメハケ、口縁端部はヨコナデ。内面ヨコハケ。	石、バ、黒、	堅緻。浅黄橙 (10YR 8/4)	外1. 4 内1. 6	"
52	" B類	外面ナナメハケ、口縁端部はヨコナデ。内面ナデ。	石、バ、チ、長、黒	やや軟質。 淡黄(2.5Y 8/3)	外1. 5	B区内堀aグ リッド
53	円筒埴輪 体 部 B類	外面タテハケの後、波状文を施す。内面ヨコハケ及びヨコナデ。	石、チ、長、輝	やや軟質。浅黄橙 (10YR 8/3)	外1. 3 内1. 2	B区内堀
54	" B類	外面タテハケ、内面ヨコハケの後ヨコナデ円形と思われる透孔有り。凸帯は台形に近い。	石、バ、輝、チ、酸、黒	堅緻。浅黄橙 (7.5YR 8/4)	外1. 2 内1. 1	"
55	" B類	外面タテハケ、内面ヨコハケの後ナデ。凸帯は平らなM字形。透孔は方形又は半円形	石、バ、チ、酸、長 大粒の砂粒を含む。	堅緻。にぶい橙 (5YR 7/4)	内外 1. 7	"
56	" B類	内外面ともにタテハケ。凸帯はM字形。	石、バ、長、チ	堅緻。 灰白(2.5Y 8/2)	内外 1. 5	"
57	" B類	内外面ともにナナメハケ。凸帯は台形に近い。	石、バ、酸、輝	やや軟質。 淡黄(2.5Y 8/3)	内外 1. 3	"
58	" B類	外面タテハケ、内面タテハケの後ナナメハケ。胎土が精選され、調整が丁寧で45に類する特徴をもつ。凸帯は台形。	礫を含まず、細粒のみ少量含む(精選) バ、輝、長、酸、角	極めて堅緻。 淡黄(2.5Y 8/3) 灰褐(10YR 4/1)	外1. 2 内1. 4	B区中堤
59	" B類	外面タテハケ、内面は丁寧な斜位ナデ。凸帯は上稜の尖る台形で、突出度が強く、1.1cmを測る。	大粒の砂礫を大量に含む チ、バ、酸、長、火、角	堅緻。浅黄橙 (10YR 8/4)	外1. 5	B区外堀1T

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
60	B類	外面タテハケ。内面ヨコハケの後、一部タテハケ。	石、バ、輝、チ	堅緻。灰白 (10YR 8/2)	外1.4 内1.0	B区内堀bグリッド
61	B類	外面タテハケ、内面ヨコハケ、凸帯は台形に近い。透孔は円形。	バ、チ、酸、輝	堅緻。灰白 (2.5YR 8/2)	外1.8 内1.1	B区内堀aグリッド
62	B類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。凸帯は台形に近い。	バ、チ、酸、長、輝、黒	堅緻。浅黄橙 (7.5YR 8/4)	外1.4 内1.6	B区内堀
63	B類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形に近い。内面調整はかなり凸凹が激しい	バ、チ、火、酸、輝、黒	堅緻。浅黄橙 (7.5YR 8/3)	外1.4 内1.1	"
64	B類	外面タテハケ、内面ナナメハケの後タテハケ。45・58に類する特徴をもつ。凸帯は台形。	礫を含まず、細粒のみ少量含む。 バ、角、長	極めて堅緻。にぶい黄橙(10YR 7/3) 灰褐(10YR 5/1)	外1.5 内1.1	B区1T一括
65	B類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形に近い。	石、バ、チ、酸、輝	堅緻。浅黄橙、内面灰白(10YR 8/4、 10YR 8/2)	内外 1.5	B区内堀
66	B類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は台形に近い。	石、バ、酸、長、チ、黒	堅緻。浅黄橙 (10YR 8/3)	外1.4 内1.0	"
67	B類	外面タテハケ、内面ヨコハケ、凸帯は台形に近い。	石、バ、チ、長、輝、火黒	堅緻。 灰白(2.5Y 8/2)	外1.4 内1.3	"
68	B類	外面タテハケ、内面ヨコハケ及びヨコナデ凸帯は台形に近い。	バ、チ、長、黒	堅緻。浅黄橙 (10YR 8/3)	外1.5 内1.0	"
69	A ₁ 類	外面タテハケ、内面斜位ナデ。凸帯は平らなM字形。	5.0mm程度の砂粒を多量に含む。 石、チ、火	やや軟質。明赤褐 (2.5YR 5/6)	外1.8	"
70	B類	外面タテハケ。内面ヨコハケの後、下方へのナデ。凸帯は台形に近い。	石、バ、チ、長、酸	堅緻。浅黄橙 (10YR 8/3)	内外 1.2	"
71	円筒埴輪底部 A ₂ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。	チ、長、角、バ	硬質。 橙(2.5YR 6/6)	外1.3 内1.1	B区内堀
72	B類	外面タテハケ、内面斜位ユビナデ。粘土板をまるめ端部を圧着した基部である。底面に篠の圧痕がある。	砂礫を多量に含む。 長、火、酸、バ	堅緻。外 浅黄橙 (10YR 8/3) 内灰(7.5Y 6/1)	外1.6	B区溝1
73	B類	外面タテハケ、内面斜位ナデ。	チ、長、角、火、バ	やや硬質。にぶい橙 (7.5YR 7/4)	外1.7	B区内堀
74	B類	外面タテハケ及び底部ヨコナデ、内面ナデ後ヨコハケ。	角、バ	やや硬質。 淡黄(2.5Y 8/4)	外1.3 内1.1	B区中堤表探
75	B類	復原底部径32.0cm(20%存)。外面タテハケ、内面斜位ユビナデ。外面のハケ調整のストロークは段をまたぐ。基部は粘土板をまるめ、端部を圧着する。第1凸帯の高さは9.6cm。凸帯は台形。	砂礫を多量に含む。 長、輝、角、バ	堅緻。 外 淡黄色 (2.5Y 8/3) 内 灰 (5Y 5/1)	外1.6	B区1T一括
76	円筒埴輪口縁部 B類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。口縁端部はヨコナデ。	細砂を少量含む。 輝、角、バ	堅緻。 灰白(2.5Y 8/2) より白っぽい	外1.6 内1.3	C区
77	A ₂ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。	粗い砂礫を大量に含む。 チ、長、角、頁	堅緻。 橙(7.5YR 7/6)	内外 1.2	C区内堀
78	円筒埴輪体部 B類	復原体部径32.0cm。外面タテハケ、内面斜位ナデ。若干環元している。凸帯は台形。	凝灰岩の大小砂礫を多量に含む。 長、角、凝	堅緻。浅黄橙 灰白(N 7/)	外1.5	C区
79	A ₂ 類	復原体部径31.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ(2回調整)。凸帯は台形。	粗い砂礫を多量に含む(礫は円礫) チ、長、角、バ	堅緻。 橙(5YR 6/6)	外1.6 内1.7	"

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
80	円筒埴輪 B類	復原体部径41.0cm。外面タテハケ、内面斜位ナデ。凸帯は台形。	砂粒を多量に含む。 長、角、酸、バ	普通。淡黄 (2.5 Y 8 / 3)	外 1. 1	C区
81	" A ₂ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。透孔は円形。凸帯はM字形。	粗い砂粒を多量に含む。 長、角、酸、バ	堅緻。 橙(2.5 Y R 6 / 8)	外 1. 6 内 2. 0	"
82	" B類	外面タテハケ、内面ヨコハケ。透孔は円形もしくは半円形。稲荷山古墳のヨコハケを伴うグループに近似。凸帯は台形。	精選。細砂を少量含む。 角、金、酸、バ	堅緻。 外 乳白 内 灰(10 Y 4 / 1)	外 1. 3 内 1. 2	"
83	" B類	外面タテハケ、内面ナナメハケ(2回調整)凸帯は台形。	砂粒を少量含む。 長、角、酸、バ	極堅緻。 外 浅黄橙 (10 Y R 8 / 3) 内 褐灰(10 Y R 6 / 1)	外 1. 4 内 1. 1	"
84	" A ₁ 類	復原体部径33.0cm。外面タテハケ(凸帯上下で異なる方向)内面ナナメハケ(幅4.7cm以上の幅広の工具使用)。凸帯は台形。	粗い砂礫を多量に含む。 長、角、酸、バ	堅緻。明赤褐 (2.5 Y R 5 / 6)	外 2. 0 内 1. 5	"
85	" B類	復原体部径30.0cm。外面タテハケ、内面斜位ユビナデ(一部ナメハケ)。凸帯は台形。	砂粒をやや多く含む。 長、角、酸、バ	堅緻。浅黄橙 (10 Y R 8 / 4)	内外 1. 5	"
86	" B類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は剥離。透孔は円形。	細砂を少量含む。 輝、雲、酸、バ	堅緻。 乳白(82と共通)	外 1. 1 内 1. 0	"
87	円筒埴輪 底部 A ₂ 類	外面タテハケ、内面斜位ナデ。ハケメは細かい。基部は粘土板成形だが肥厚しない。	粗い砂礫を多量に含む。 チ、長、角、バ	堅緻。 橙(5 Y R 6 / 6)	外 1. 1	"
88	" B類	外面タテハケ、内面斜位ユビナデ。凸帯は台形。	細礫をやや多く含む。 長、角、酸、バ	堅緻。 淡黄(2.5 Y 8 / 4)	外 1. 5	"
89	円筒埴輪 底部 B類	外面タテハケ。内面斜位ナデ。底面に捺圧痕有り。残存高7.9cm。	粗い砂礫をやや多く含む バ、角、長	堅緻。 淡黄(2.5 Y 8 / 4)	外 1. 4	C区
90	" A ₂ 類	復原体部径20.0cm。(20%存)。外面タテハケ、内面斜位ナデ。底部に捺圧痕有り。粘土板をまとめて基部を作っている。	粗い砂礫を多量に含む。 長、バ、角、酸	普通。 橙(5 Y R 7 / 3)	外 1. 7	C区
91	円筒埴輪 口縁部 A ₁ 類	復原体部径36.0cm。(25%存)。外面ナナメハケ、内面ナナメハケ、口縁部はヨコハケ口縁部は端部付近で屈曲して水平に開く。内面にの窯印有り。横画の右側が長くなりすぎたので指でナデ消している。色調が赤いことと、焼成良好な点から生出土産と推定される。	大粒の砂礫をやや多く含む。 チ、長、バ、酸、輝	極めて堅緻。 赤(10 R 5 / 8)	外 1. 9 (工具幅 4.6cm以上 ある) 内 2. 1	平成2年度 前方部東境掘 表採
92	円筒埴輪 体部 B類	外面タテハケ、内面斜位及び横位ナデ。凸帯は突出度が強いが一部調整が不十分である。凸帯は台形。	大粒の砂礫を多量に含む チ、長、バ、輝、角、酸	極めて堅緻。にぶい 黄橙(10 Y R 7 / 4)	外 1. 5	"
93	円筒埴輪 体部	外面タテハケ、内面斜位ナデ。原体は目の粗い、浅い刻みのもの。凸帯はM字形だが調整は丁寧である。内面調整も丁寧で、ナデのみを用いるのが特色。凸帯直下に方形の透孔有り。	大粒の砂礫を多量に含む チ、長、バ、火、針	極めて堅緻。にぶい 橙(7.5 Y R 7 / 4)	外 2. 8	昭和63年度 くびれ部東 表採
94	" B類	外面タテハケ、内面上段ヨコハケ、下段横位ナデ。93に類似し、凸帯直下に方形透孔有り。内面のヨコハケから、口縁部に近く、最上段と思われる。凸帯はM字形。	大粒の砂礫を多量に含む チ、長、火、バ、輝、針	極めて堅緻。 橙(7.5 Y R 7 / 6)	外 1. 7 内 1. 3	"
95	" B類	外面タテハケ、内面ナナメハケの後縦位ユビナデ。凸帯はM字形。	大粒の砂礫を多量に含む チ、長、酸、角、輝、針	極めて堅緻。にぶい 橙(7.5 Y R 7 / 4)	外 1. 9	"
96	" B類	外面タテハケ、内面横位及び斜位ナデ。凸帯は台形。	大粒の砂礫を多量に含む バ、チ、角、酸、針	堅緻。 橙(2.5 Y R 6 / 6)	外 1. 0	昭和63年度 表採

番号	種 別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
97	“ B類	外面タテハケ、内面上部ヨコハケ。上端は口縁部となるために内面にヨコハケ調整が伴う。凸帯下に円形透孔。凸帯はM字形。	大粒の砂礫を多量に含む チ、長、角、バ、火、針	極めて堅緻。 橙 (5 Y R 6 / 6)	外 2. 6 内 2. 4	昭和63年度 前方部東表探
98	円筒埴輪 底部 A ₂ 類	外面タテハケ、内面ナナメハケ。基底部は粘土板の両端を圧着して成形。底部は肥厚しない。復原底部径23.0cm。凸帯は台形。	粗い砂礫を極めて大量に含む。 チ、長、バ、酸、角、火頁	普通。 橙 (5 Y R 7 / 8)	外 1. 5 内 1. 8	昭和63年度 表探
99	“ A ₁ 類	外面基底部ヨコハケの後タテハケ。内面基底部ユビナデ。やや上方からナナメハケ。	砂礫をやや多く含む。 バ、酸、角	堅緻。明赤褐 (2.5 Y R 5 / 8)	外 1. 3 内 1. 4	平成2年度 造出中央表探
100	円筒埴輪 A ₁ 類	底部径35.5cm、体部径33.0cm。外面タテハケ、内面ナナメハケ及びユビナデ。凸帯は平らなM字形。透孔は円形。底部はかなり変形しており、全体的にも雑なつくり。尚外面の一部にタテ方向の亀裂のため、ナデをタテに施した箇所あり。	チ、長、石、バ、黒	極堅緻。 赤橙 (10R 6 / 8)	内外 1. 7	平成2年度 前方部東表探
108	須恵器壺 口縁部	復原口径15.0cm (13%存)。口縁端部をつまみあげ尖らせ、下端にアゴを作る。無文外面はガラス質釉出。内面は灰オリブ色の灰を被る。	砂粒をほとんど含まない 精選土。	堅緻。 外 緑黒(10G2/1) 内 灰(7.5Y5/1) 器肉 灰褐		平成2年度 西墳掘造出 表探
109	須恵器壺 頸～肩部	復原頸部径 9.0cm。外面カキメ、内面ヨコナデ。外面は斑点状に灰を被る。	砂粒はほとんど入らない が、白色バミスが少量入る。	堅緻。内外明青灰 (5 B 7 / 1) 器肉 褐灰 (7.5 Y R 6 / 1)		
110	須恵器壺 肩部	外面平行タタキ(縦位)の後、カキメ調整内面明瞭で深い同心円状当て具痕。	109 と共通。	堅緻。 外 灰白(N 7 /) 内・青灰(5PB5/1) 器肉紫灰(5RP6/1)		
111	須恵器大甕 口縁部	復原口径34.6cm。口縁端部直下に太い貼付凸帯。外面にはオリブ黒色(5GY2/1)のガラス釉出。	“	堅緻。 内外 灰(7.5Y6/1) 器肉褐灰(5YR6/1)		平成2年度 前方部西側 墳掘表探
112	“	復原口径36.0cm。口縁端部をつまみ上げ、尖らせている。2条の凸帯が現存。	109 と共通。 (長石が入る)。	堅緻。 外 暗灰(N 3 /) 内 器肉 灰(7.5 Y 6/1)		平成2年度 造出中央部 表探
113	“	口縁端部をつまみあげ受口とする。外面は幅の広い凸帯とし、更に下端に鋭い凸帯を付す。凹線の下に接して歯齒刺突文を施し緑黒色(5G2/1)のガラス釉出。また内面は灰被り。	109 と共通。	堅緻。 内外 灰(7.5Y6/1) 器肉褐灰(5YR6/2)		平成2年度 前方部西墳掘 造出南2表探
114	須 恵 器 大甕頸部	体部は外面平行タタキ、内面同心円状当て具痕。頸部は内面ヨコナデ及び一部同心円状当て具痕が残る。同一個体と思われる。頸部小片(平成2年度西造出南表探)あり	109 と共通。	堅緻。 外 灰(N 5 / 1) 内 明青灰(5B7/1) 器肉 アズキに近い 灰褐(7.5Y R 5/2)		昭和63年度 表探
115	須恵器大甕 口縁部	外面くすべ焼き、内面部分的にオリブ灰色の灰被り。3条1組の凹線の上下に歯齒刺突文を施す。色調は異なるが113と同一個体の可能性有り。	長石の溶けたものを多く含む。	堅緻。 外 暗灰(N 3 /) 内 灰(N 6 /) 器肉 赤灰(5R6/1)		平成2年度 造出南表探
116	須恵器 大甕体部	外面は木目に直交した刻みの平行タタキ、内面と直径の大きい同心円状当て具痕。外面は弱いガラス釉出	砂粒をほとんど含まず、 白色微粒子をわずかに含む。	堅緻。 外 暗灰(N 3 /) 内 器肉 灰(N6/)		昭和63年度 表探
117	“	外面目の粗い格子目状タタキ、内面同心円状当て具痕半スリケン。	109と共通	外 暗青灰(5B4/1) 内 灰(N 6 /) 器肉 赤灰(5R6/1)		平成2年度 造出北表探

番号	種 別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
118	須恵器 大甕体部	外面目の粗い格子目状タタキ（斜位）、 内面同心円状当て具痕を半スリケシ（不十分）。 外面は前面に弱いガラス抽出。	109と共通	堅緻。 外 灰（10Y4/1） 内 灰（N5/） 器肉 紫灰（5P6/1）		
119	須恵器甕 体 部	外面縦位の格子目状タタキ、内面同心円状 当て具痕を残す。外面は灰被り。	“	堅緻。 外 灰白 （2.5GY8/1） 内 暗青灰（5PB4/1） 器肉 赤灰（5R6/1）		平成2年度 造出中央表探
120	須恵器 器台脚部	外面カキメ、内面ヨコナデ。透孔の配置は 4方向。3条の平行凹線により相対的凸線 を作る。3段の、端正で均一的N字状波状 文を施す。尚、波状文の切り合い部分をナ デケシした痕跡あり。	砂粒は全く含まない。細 かい白色バミスを少量含 む。	堅緻。 内外、器肉 灰白（N7/） 外面と部分的に 灰（N5/）		平成2年度 造出北表探
121	“	外面はカキメの後、2段の波状文（やや雑 で突出の著しいN字形）。内面ヨコナデ。 透孔は三角形。	砂粒はほとんど含まない 白色微粒を少量含む。	堅緻。 外 灰（N5/） 内 器肉 灰（N6/）		平成2年度 造出中央部 表探
122	“	外面カキメ（現状で）2段の波状文を施す 間帯は2条の太い凹線。透孔は三角形	121と共通。	堅緻。 内外、器肉共、 オリーブ灰色 （2.5GY6/1）		平成2年度 西墳掘造出 南2表探
123	“	外面カキメ後波状文、内面ヨコナデ。透孔 は上下直列式配置。	砂粒はほとんど含まない が長石の溶解した粒を微 かに含む。	堅緻。 外 青灰（5B5/1） 内 器肉 緑灰（10G6/1）		平成2年度 造出北表探
124	須恵器 大甕体部	外面目の粗い格子目状タタキ、内面同心円 状当て具痕半スリケシ。117と同一個体。	109と共通	堅緻。 内外、器肉 灰白（N7/）		平成2年度 造出北表探
125	堤 瓶	復原径20.0cm。現存部分は底部として製作 された扁平側。外面同心円状カキメ、内 面ナデ。外面はガラス抽出。	“	堅緻。 外 暗オリーブ灰 （2.5GY3/1） 内 明青灰 （5PB7/1） 器肉 紫灰 （5RP6/1）		昭和63年度 表探
126	堤 瓶	底部側の扁平な体部。外面同心円状カキメ は125より疎で別個体とみられる。肩部に ケズリ調整。内面には粘土板を掌でのした 時の掌紋あり。外面には半透明の自然釉。	109と共通。	堅緻。 外 灰オリーブ （7.5YR6/2） 内 明青灰（5B7/1） 器肉 灰褐 （7.5YR5/2）		平成2年度 前方部西墳掘 造出南表探
127	“	125と同一個体。蓋として製作される凸面 側体部。カキメ調整。	125と共通。	125と共通。		平成2年度 前方部西墳掘 造出南表探
128	須恵器 大甕体部	内面は灰白色の灰被り。	116と共通。	堅緻。 外 灰（N4/） 内 青灰（5B5/1） 器肉紫灰（5RP5/1）		昭和63年度 表探
129		中世陶器か？（こね鉢の可能性あり。） 復原径32.0cm（小片からの復原）。内面、 外面回転ヨコナデ。口縁部は暗灰色 （N3/）のガラス抽出。内面は灰被り。	砂粒はほとんど含まない 長石粒と微少の白色粒子 を少量含む。	極堅緻。 外 灰（N6/） 内 オリーブ灰色 （2.5GY5/1） 器肉 灰白（N7/）		平成2年度 C区内堀

三小 結

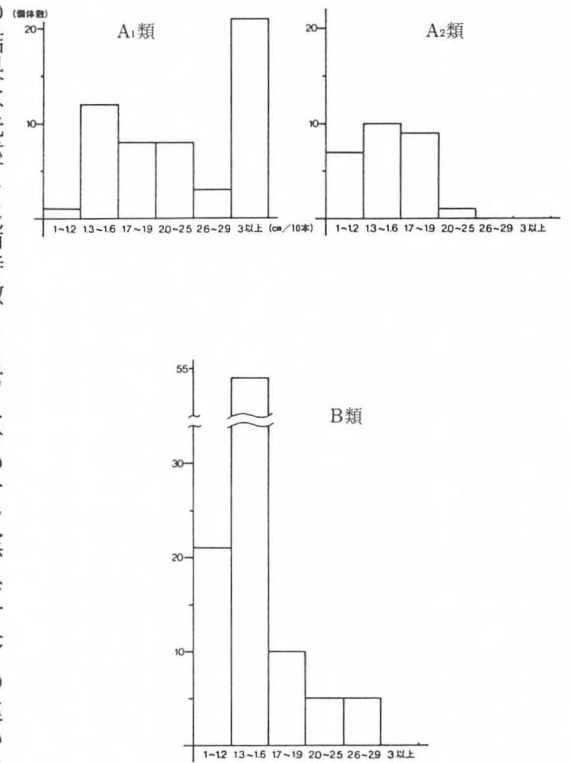
二子山古墳の円筒埴輪について

二子山古墳の円筒埴輪は、諸特徴からA₁類、A₂類、B類に分類される。

全体を復元できる資料がないので、部分的な問題になるが、おおむねA₁類は大型品であり、多条凸帯の円筒埴輪になるものがあると考えられる。A₂類はやや薄手のつくりであることから、中型品になる可能性がある。B類は他の二類とはまったく異なる特徴を有するものであり、特に白色針状物質を含み、透孔が長方形になるものがあることはA₁類、A₂類とは異なる窯（工人集団）の存在を想定させ得るのに充分である。その候補としては、南比企丘陵を先ず挙げることができる。

A₁類の91の破片は口縁部の破片であるが、内面に格子状の窯印が存在する。まったく同じ窯印をもつものに、生出塚窯跡群出土の円筒埴輪がある。^(註1)従来から生出塚産の埴輪が、埼玉古墳群に供給されていたであろうことは、先学によって指摘されてきたことであるが、今回の資料は、その考えをさらに補強する材料であるといえよう。

さて、二子山古墳の円筒埴輪をさらに理解するために、今回はハケメに注目してみた。その結果が第1表である。ハケメ一〇本に対する幅を示したものであり、縦軸は個体数、横軸は幅（センチ）を表す。ハケメ工具は器壁に充てる角度によって同じ工具でも差異が生じるため、幅をもたせて検討した。表を見ていただければ一目瞭然であるが、A₁類にハケメの粗い工具を用いた円筒埴輪が突出しており、B類はハケメの細かい工具を用いた円筒埴輪が突出している。A₂類に関しては個体数が少ないため、特徴といえるほどの突出度はみとめられない。



第1表 円筒埴輪のハケメの特徴

この結果は先述した諸特徴とも考え合わせ、窯（工人）の違いを如実に示している可能性が極めて強いといえよう。

円筒埴輪の編年の位置付けに関しては、破片資料が多いこともあり、前回の見解（第五集『二子山古墳』を参照）である、稲荷山古墳↓二子山古墳↓鉄砲山古墳と同じとみて大過ないと思われる。

（日高 慎）

（註）

- 1 山崎武『鴻巣市遺跡群Ⅲ』（鴻巣市文化財調査報告 第3集）鴻巣市教育委員会 一九八七

- 2 最近の見解で例えば

若松良一『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書 第七集）埼玉県教育委員会 一九八九

山崎武・塩野博「生出塚と馬室埴輪製作跡」『月刊 考古学ジャーナル』No. 331 一九九一・四 などがある。